

研究ノート

クリシュナムルティ・ノート
——『問いとこたえ』の翻訳と用語についての注釈——

木村洋二・小林純子

Krishnamurti : An Annotated Translation
of “Questions and Answers”

Yohji KIMURA and Junko KOBAYASHI

Abstract

This is a translation of J. Krishnamurti's book “The Questions and Answers” and an analysis of some key words. This time, 10 chapters are translated and studied. Krishnamurti's words and statements are simple, but he used words with unique clarity. To understand his words and points of the problems he talked all the time, we made a glossary of some keywords. This study might be the first step to deal with Krishnamurti in academic fields in Japan. We translated Krishnamurti's words into Japanese attentively and tried to bridge two gaps. One gap is between Krishnamurti's English words and Japanese, and the other gap is between words and contents in Japanese. In translation, Japanese words which are exact and precise to Krishnamurti's concept are carefully selected from the daily spoken language by the younger generation.

Key words : perceive, observe, see, attachment, self, me, division, fact, whole, insight, intelligence

抄 録

この研究ノートはJ.クリシュナムルティの著書『問いとこたえ』の翻訳と、クリシュナムルティの思想と言葉についてのノートである。今回はその本の中の第一章から第十章までを翻訳し、キーワードについて気づいたことを書きとめた。クリシュナムルティが話すことばは単純であるが、それらはクリシュナムルティ独特の明晰さでもって語られている。クリシュナムルティのことばをより精密に理解するため、クリシュナムルティが話しつづけた問題を明らかにするために、クリシュナムルティのことばについての用語集を作成した。この研究ノートは二つの目的をもっている。まず、これまでクリシュナムルティの思想がアカデミックな場で論じられる機会がなかったため、この研究ノートがその端緒となることをめざした。もう一つは、翻訳にともなういくつかの溝を埋めることである。クリシュナムルティのことばを損なうことなく、クリシュナムルティの意図や内容を正しく伝える日本語をさがし、かつことばとして手ごたえのある、実感のもてることばに翻訳することをめざした。

キーワード：知覚、観察、見る、執着、自己、私、分断、事実、全体性、洞察、知性

1. はじめに

ジッタ・クリシュナムルティ (Jidda Krishnamurti) は1895年5月12日インドのアンドラパラデシュ州マラダナパールに生まれ、1986年2月17日アメリカカリフォルニア州オハイで没した孤高の思想家である。14歳のとき、「神智学協会 (Theosophist)」のベサント夫人 (Annie Besant) とリードビーター (C. W. Leadbeater) によって未来の世界を導く精神的指導者と認められ、ヨーロッパにわたって教育をうけた。26歳で当時世界的な広がりをもっていた神秘主義教団「星の教団 (the Order of the Star)」の長となるが、8年後、あらゆる集団は宗教性を腐敗させる、として教団を解散する (このノートの一部で訳出したのはその時の「解散宣言」である)。その後「真理は組織になじまない」として、すべての組織を離れたクリシュナムルティは、国家はいうにおよばず、すべてのイデオロギーや宗教や人種民族を超えてひとりインド、ヨーロッパ、アメリカを巡りながら、各地で集った人々に自らの思想を静かに語りつづけてきた。

聴衆に直接語りかけるようにして発せられるクリシュナムルティの言葉は、つねに明晰で力強い。平明な言葉に包んで語り起こされる思想と洞察の豊かさは、異例というべき破壊力と喚起力をふくんでいる。「真理はあなた自身のなかにある」として、個々人にあらゆる権威からの自立を促し、さらに関係における自己洞察を通じて自我の呪縛からの解放を要請するその思想は、21世紀に贈られるべき知的遺産のひとつとして、欧米圏では高い評価を得ている。「ブッダが話しているかと思われるほど、その言葉は力強く、内的な威厳に盈ちていた……」と、1961年の講話会に参加したオルガス・ハックスレーは書き残している。文献リストからもうかがわれるように、書物として出版された講話やテープは200巻を超え、英語圏を中心に世界中に広範な読者を獲得して今日に至っている。

これに対し、日本では、クリシュナムルティの名は一般に知られているとはとてもいえない状況にある。その理由のひとつに、クリシュナムルティの名が、その明晰な思想の部分が十分な照明を与えられないまま、カリスマ的権威と神秘主義のオーラをともなって日本に導入されたことがあげられるだろう。事実、翻訳書の多くには、彼が有したと言われる超能力的な「予知」や「治癒力」、彼自身の「神秘体験」についての畏敬に満ちた言及がみられ、書店のコーナーでは今もクリシュナムルティは「精神世界」のコーナーに陳列されている。「神秘」のレットレルは、排斥するにせよ崇拜するにせよ、明晰な知性による吟味と自己洞察の運動を妨げる。

しかし、彼の言葉に虚心に耳を傾けると、その思想がいかがわしい「神秘主義」と無縁のものであることが明らかになるだろう。これからこのノートが明らかにしていくように、クリシュナムルティの思想は、意識や感情、自己と他者、あるいはイメージと世界との関係についての、科学的としか言えない明晰な洞察にみちている。彼の議論と洞察は、深いところで認知科

学，ネットワークの畳み込み理論，生命システム論など現代科学の新しいうねりとつながっており，いずれ新しい世紀の人間科学によって鮮やかに評価される日がやってくるだろう，と筆者は確信している。

このノートは，クリシュナムルティの思想を，懐疑と批判精神を共通のベースとするアカデミズムの世界に導入する糸口をひらくことを意図している。「神秘主義」として排斥するのでも，「聖者」として崇拝するのでもなく，事実と論理だけに依拠して，その思想の真価を吟味し，未来の人間科学に，つまり人間による人間の理解の発展に側面から寄与することを意図している。

クリシュナムルティが日本の思想界はもちろん若者，文化人，読書人にあまり影響力をもたなかったもうひとつの理由に翻訳の問題があるだろう。クリシュナムルティの英文は平易な日常の言葉で，精確かつ緊密に綴られている。言葉が喚起するイメージはいつも明確であり，時に反語やユーモアを交えるその思考にもリズムカルな流れがある。したがって，日本語に移すに際して不注意に（関係代名詞などで）文節の順序を動かすと，思考の流れの必然性が見えにくくなってしまふことがある。また，冗長さを欠いているために，微妙な読み違いや言葉のズレが思考の内在的な緊密さの感覚をそこないやすい。クリシュナムルティが英語圏で大きな影響力をもちながら，日本ではあまり読まれていない理由は，明晰で簡潔なその英語文（講話）を日本語に移すその難しさにも一因があるように思われる。

私たちは，日本のとくに若い世代が，クリシュナムルティの生きた思考の鼓動にふれるには，かれらによっていま使われているできるだけ平易な日本語に移すことが必要ではないか，と考へ，すでに力作の翻訳があるが，この研究ノート上で実験的に日常的な日本語への移し変えに挑戦してみることにした。以下の翻訳は，共著者間で内容について討論したものを，大学院生の小林が自身の言語感覚に沿って日本語にうつしかえたものである。なお，翻訳のテキストとしては，1980年，84歳のクリシュナムルティがアメリカ，イギリス，スイスでおこなった講話を集めた小さな本（Questions & Answers, Mirananda, Krishnamurti Foundation Trust, UK, 1982）を採用した。各章がコンパクトにまとまっているのと，本自体が小ぶりなことが理由である。訳出したのはうち5分の1であり，残りは次号以降順次掲載していきたい。その平易で緊密かつ論理的な英文を読者に直接ふれていただくために対訳の形式で原文も掲載した。

「クリシュナムルティとことば」と「用語集・グロッサリー」は小林が翻訳の過程で気づいた問題点やキーワードをノートとして書きとめたものである。木村は，クリシュナムルティの思想が「ソシオン」の畳み込み理論に対応する部分をもつことに興味を惹かれており，近くその問題について書きとめるつもりである。また，冒頭で述べた「星の教団解散宣言」の新訳もあわせて掲載した。すでに大野純一氏や高橋重敏氏のすぐれた翻訳があるが，あえて小林がみずからの言語感覚にそって日本語へ移し変えを試みた。この宣言には，34歳にして世界的教団を自らの手によって解散した若き教主クリシュナムルティの思想の到達点とその原点が簡潔に

示されている。第二次世界大戦そして戦後の東西冷戦という歴史の荒波を経て、今イデオロギーの廃墟のなかで新しい世紀を迎えようとするわれわれに、1929年のこの「解散宣言」はゆらぐことなく問題の核心を指し示しているように思われてならない。

注1) クリシュナムルティの名は欧米圏では「明晰な神秘主義者」として知られている。ヨーロッパでは「キリスト」の、インドでは「ブッダの再来」としてその名を畏敬の念をもって口にする人々も少なくない。入手しやすいペンギン版のKrishnamurti Readerは版を重ねており、クリシュナムルティを静かに愛読する者は、年齢、国籍、階層、人種を問わない。ちなみに親友オルガス・ハクスレーも序文を寄せており（「生と覚醒のコメンタリー」の訳書あとがきに翻訳がある）、彼の晩年の小説「島」に登場する東洋人の老賢者のモデルはクリシュナムルティであるといわれる。

注2) 触発する生きた「言葉」が「教え」となって権威をもち、その「教え」が「教義」として固定された時から死んだ宗教がはじまる、と考えたクリシュナムルティは、自身の語った言葉はそのまのかたちで残すように遺言し、また教団の結成も教義解釈も禁じたと伝えられる。遺言はクリシュナムルティ財団によって忠実に守られ、多くの講話がオーディオテープとビデオテープ（文献リストを参照）で供給されている。出版された著書（60冊にのぼる）も、彼が集会で語った言葉をテープからそのまま活字に起こしたものがほとんどである。なお、1997年からはインターネット上にホームページが開設され、充実した情報提供が行われている（224pを参照）。聴衆を前に即興的に語り起こされた講話に耳を傾ける＝文章に目を通した者はだれしも、そこで展開される論理の明晰さと思考の密度、そして言葉をつむぎだす間合いの必然性とたくまざるユーモアのセンスに驚かされるだろう。（ちなみに、関西大学の視聴覚教室のライブラリーに、まもなくクリシュナムルティの全ビデオとオーディオテープが収納される予定である。）

注3) あるオウム真理教の信徒は「もしクリシュナムルティを読んでいたら自分には入らなかつたろう」と語っている。実際、クリシュナムルティが若い人たちに広く読まれていなかったということが、神秘主義カルト教団への思想免疫を欠くことになり、「オウム真理教」というカルト教団がこの国を襲って前代未聞の危機に陥れることになった無視できない要因である、と筆者は考えている。なお、日本の戦後最大級の事件というべきオウム事件を世界史的な視野で位置づけるには、クリシュナムルティの思想を解説するほかに、6千人の高学歴信者をあつめてアメリカ・オレゴン州にコミュニオンを建設したインド人の「グル」、バグワン・ラジネーシ（Bagwan Shree Rajineesh, 1905-1988）の思想とそのカルト集団（最盛期全世界で20万人を超えた）の（誕生から崩壊にいたる）「運命」の社会学的分析が必要だろう。

注4) たとえば、「真実在」という日本語訳で読者はなにを概念的にイメージするだろうか。the reality という英文をみないかぎり、まず具体的な概念は湧いてこないだろう。すべてがすべてこの調子ではないが、力のこもった翻訳業があるにもかかわらず（あるいはその力ゆえに）、ふと手に取った若者に素直に受けとめられる言葉に置き換えられたとは言いがたい部分が少なくないように見うけられる。

『ブッダのことば』を原点から直接平易な日本語に口語訳した中村元氏は、その出版にさいして、「訳文が聖典としての壮重さが無い」というクレームを仏教関係者から受けたと岩波文庫の「あとがき」に記している。古来文物を外国からの翻訳移入に仰いできたわれわれ日本人は、つねに「翻訳」を経ることで、明晰な「思想」が難解でありがたいものに化ける危険と接してきたし、あえてこの危険を犯すことが学者や僧侶が自分流の学派や教派をつくり出す上で効果をもったようにおもわれる。すくなくとも、翻訳と解説が不可避であるというこの事実が、曖昧な分りにくさを深遠な真理としてありがたがるこの国の人文思想系の知的風土を大きく規定してきたことは否定できない。

聖なる原典や教典から放射される難解で深遠な意味の幻覚こそ、人類の知性を麻痺させ退嬰させる病根であるとしてクリシュナムルティが指弾して止まらなかった当のものである。真理とは、ありがたい意味の目眩ではなく、あなた自身の洞察によって生まれる明晰な知の光である、と説きつづけてきたクリシュナムルティのつづよい思想と言葉が、できるだけ平易な日本語でいま新しい世代に届けられなければならない、と考える所以である。

- 1 はじめに
- 2 クリシュナムルティとことば
- 3 星の教団解散宣言
- 4 『問いとこたえ』(“Questions and Answers”より)
- 5 クリシュナムルティ用語集
- 6 クリシュナムルティ文献リスト



希望は絶望にとらわれた意識のもうひとつの運動である
(「生と覚醒のコメンタリー」より。写真は Last Talks at Saanen 1985より転載。)

2. クリシュナムルティとことば

クリシュナムルティの著作は、人々との対話、問答をそのまま収めたものが多い。人々のクリシュナムルティへの質問は、人であればだれもが一度は抱いたことのあるような問いかけばかりで興味深く、また、それらに対して真正面から、丁寧に緻密にこたえていくクリシュナムルティの返答も読みごたえがある。クリシュナムルティがとりあげている問題は、人が生きているかぎり向い合わなければならない問題、すなわち「人」の問題であり、社会学や心理学、精神医学や宗教など多くの学問、領域とも深くかかわっている。クリシュナムルティの話すことは具体的で、論理的で、語られることに曖昧さというものがない。矛盾を矛盾といえる誠実さがある。クリシュナムルティは、推論や仮説、また結論というような時間と思考から導き出されたものではない、自分の中にあるなにか確実なものに照らして、ただそうなのだというように、淡々とことばをならべているように感じられる。

クリシュナムルティはどんな質問がなされてもつねに冷静で、ときにはユーモアを交えてこたえる。人々との対話、やりとりから伝わってくるその雰囲気は、説得や強制、扇動、説法、教義、講演といったものからはほど遠い。クリシュナムルティは、自分を権威者にすることも権力をもたせることも許さず、信奉者や弟子をもつことも拒否し、組織や団体に属さず、いわば身一つで、人々に話をして歩いた。「私をたてまつるな、私をまつりあげてはならない」と、クリシュナムルティ自身が何度も何度もいっているが、クリシュナムルティが望んだこととは一体何だったのだろうか。クリシュナムルティを尊敬し、なかば崇めるような気持ちで、クリシュナムルティの著作、ことばに触れるとき、そのとき、その人はすでにクリシュナムルティのことをグル化しており、語られることばをそのまま受け取ることはできない。クリシュナムルティは、人々に見ること、そして自ら気づくことを、ただただ、うながしたかったのではないだろうかと思ふ。人々に話しかけるとき、クリシュナムルティは決して「教える (= teach)」ということばを使わなかった。

日本においてこれまでクリシュナムルティがあまり読まれもせず、正しい(?)紹介もされぬままであったことはとても残念である。宗教や教育にとってだけでなく、社会にとっても、クリシュナムルティがきちんと読み解かれることがいま必要であり、とても重要なことであると強く思う。クリシュナムルティの文章、ことばには無駄がない。まずクリシュナムルティにおいて伝えようとするものが明確であり、それを伝えるのにふさわしいことば、必要なことばがきちんと選ばれている。そのため、一つひとつの文章も簡潔で、もってまわったようないい方やわかりにくさがない。クリシュナムルティのことばは、エッセンス、公式のようなものである。クリシュナムルティにおいては核心しかことばにされていないのだと思うが、私は具体的に自分自身のこととして生活の中にもちこんで考えてみたいと思ひ、日本語に訳すことにし

た。本や辞書を閉じているときも、クリシュナムルティと人々とのやりとりを自分の中にもちこんで、自分の心の動きに敏感になり、耳目を傾けた。これまで気づかなかった微細な動きがふと見えたり、クリシュナムルティのいったとおりでと思わず笑ったこともあった。それはとてもおもしろいことだった。そして、クリシュナムルティのことばはただ読んでさえいればいいというものではないことに気づいた。当たり前の話だが、読む、読めるということと理解する、ものごとをきちんととらえるということはまったく別のことなのである。

一つのことばは複数の意味をもっている。また、ことばは、時と場、その一瞬と深く結びついているため、あとからそれを読む者、聞く者は精一杯解釈するしかないのだが、どの意味をとるかでまったく異なるものを指すことにもなりうる。途中、何度もどう訳せばよいのか、意味のつかめないうことばに出会った。図書館で大きな辞書を引いたり、書店に行って、クリシュナムルティの他の著作の翻訳本を開くこともあった。私の判断にしかすぎないが、クリシュナムルティの意を酌んでいないというか、誤訳としか思えない箇所、語もあつたし、翻訳とはいえ、日ごろあまり使われていない、ことばとしてなじみのうすい日本語が多く使われているのが気になった。この翻訳では何よりもまず、クリシュナムルティの簡潔で明晰なことばを損なわぬようにし、また、私たちのそばにある、私たちに身近なことばを選ぶことを心がけた。クリシュナムルティはあまり接続語を用いない。だから、前後の文脈が逆接なのか順接なのかわかりにくいところもあるのだが、この翻訳ではどんなことばも加えなかった。「だから」や「したがって」、「ところで」といわれると、前後にそういうつながりがあるかのように思ってしまうからである。

クリシュナムルティを読んでいると、「真理」を熱心に追い求める人々のことがわからなくなる。人々は一体何を、どのような真理を求めているのだろうか。そして私はあることばを思い出す。「ほんとうっていうのはわからんもんでないと思う」。これは二十年以上の間、花を見つめ、花の絵を描きつづけている福井の画家助田茂蔵先生のことばである。その人は真実や真理ではなく「ほんとう」ということばを使ったのであるが、もしそういうものがあるとしたら、知識や能力に関係なくだれにでもわかるものであるはずだし、そういうものは動かしようがない。そうでないのなら自分はそれはほんとうではないと思うと話されていた。私は真理とは何であるか知らない。だが、そういうものがあるとしたらやはり、一目瞭然に、だれにでもわかるものであると思う。真理や真実について語られるからといって、厳かなことばや難解なことばで、あるいは人を高揚させるようなことばで語られなければならない理由はないと私は思う。選ばれたことばやそのならべ方、クリシュナムルティのことばを読んでいると、真理は現実離れした特殊、特別なものではなく、よくわからぬまま崇めるためのものでもないのだと感じる。また、平易なことばであっても、真実は真実であるならばちゃんと伝わるということがわかる。私はそうしたクリシュナムルティのことばをだいなしにしたいくなかった。それはクリシュナムルティという人を損ねることにもなるし、クリシュナムルティがしようとしたことを誤って

人々に伝えることにもなってしまうからである。

翻訳という作業の途中でこぼれおちるものが必ずある。英語と日本語では文法がまずちがうし、仮にことばとしては同じものを指していたとしても、それぞれの語に込められているイメージは異なる。どうしても日本語にならないところもある。くりかえしになるが、クリシュナムルティのことばは平易だが、論理的で明晰でわかりやすい。クリシュナムルティという人を正しく理解するためにも、英語と日本語の間にある溝を越えるためにも、クリシュナムルティのことばそのものに耳を傾けることもまた重要であると感じた。(断っておくが、クリシュナムルティのことばは「教え」ではない。) これらのことが研究ノートをつくることになった理由であり、クリシュナムルティのことばである原文と翻訳である日本語の両方を載せることにした理由である。

3. 星の教団解散宣言

We are going to discuss this morning the dissolution of the Order of the Star. Many will be delighted, and others will be rather sad. It is a question neither for rejoicing nor for sadness, because it is inevitable, as I am going to explain...

I maintain that Truth is a pathless land, and you cannot approach it by any path whatsoever, by any religion, by any sect. That is my point of view, and I adhere to that absolutely and unconditionally. Truth, being limitless, unconditioned, unapproachable by any path whatsoever, cannot be organized; nor should any organization be formed to lead or coerce people along any particular path. If you first understand that, then you will see how impossible it is to organize a belief. A belief is purely an individual matter, and you cannot and must not organize it. If you do, it becomes dead, crystallized; it becomes a creed, a sect, a religion, to be imposed on others.

This is what everyone throughout the world is attempting to do. Truth is narrowed down and made a plaything for those who are weak, for those who are only momentarily discontented. Truth cannot be brought down, rather the individual must make the effort to ascend to it. You cannot bring the mountaintop to the valley....

So that is the first reason, from my point of view, why the Order of the Star should be dissolved. In spite of this, you will probably form other Orders, you will continue to belong to other organizations searching for Truth. I do not want to belong to any organization of a spiritual kind; please understand this....

If an organization be created for this purpose, it becomes a crutch, a weakness, a bondage, and must cripple the individual, and prevent him from growing, from establishing

his uniqueness, which lies in the discovery for himself of that absolute, unconditioned Truth. So that is another reason why I have decided, as I happen to be the Head of the Order, to dissolve it.

This is no magnificent deed, because I do not want followers, and I mean this. The moment you follow someone you cease to follow Truth. I am not concerned whether you pay attention to what I say or not. I want to do a certain thing in the world and I am going to do it with unwavering concentration. I am concerning myself with only one essential thing: to set man free. I desire to free him from all cages, from all fears, and not to found religions, new sects, nor to establish new theories and new philosophies. Then you Will naturally ask me why I go the world over, continually speaking. I will tell you for what reason I do this; not because I desire a following, nor because I desire a special group of special disciples. (How men love to be different from their fellow-men, however ridiculous, absurd and trivial their distinctions may be! I do not want to encourage that absurdity.) I have no disciples, no apostles, either on earth or in the realm of spirituality.

Nor is it the lure of money, nor the desire to live a comfortable life, which attracts me. If I wanted to lead a comfortable life I would not come to a Camp or live in a damp country! I am speaking frankly because I want this settled once and for all. I do not want these childish discussions year after year.

A newspaper reporter, who interviewed me, considered it a magnificent act to dissolve an organization in which there were thousands and thousands of members. To him it was a great act because he said: "What will you do afterwards, how will you live? You will have no following, people will no longer listen to you." If there are only five people who will listen, who will live, who have their faces turned towards eternity, it will be sufficient. Of what use is it to have thousands who do not understand, who are fully embalmed in prejudice, who do not want the new, but would rather translate the new to suit their own sterile, stagnant selves?...

Because I am free, unconditioned, whole, not the part, not the relative, but the whole Truth that is eternal, I desire those, who seek to understand me, to be free, not to follow me, not to make out of me a cage which will become a religion, a sect. Rather should they be free from all fears—from the fear of religion, from the fear of salvation, from the fear of spirituality, from the fear of love, from the fear of death, from the fear of life itself. As an artist paints a picture because he takes delight in that painting, because it is his self-expression, his glory, his well-being, so I do this and not because I want any thing from anyone. You are accustomed to authority or to the atmosphere of authority which you

think will lead you to spirituality. You think and hope that another can by his extraordinary powers—a miracle—transport you to this realm of eternal freedom which is Happiness. Your whole outlook on life is based on that authority.

You have listened to me for three years now without any change taking place except in the few. Now analyze what I am saying, be critical, so that you may understand thoroughly, fundamentally....

For eighteen years you have been preparing for this event, for the Coming of The World Teacher. For eighteen years you have organized, you have looked for someone who would give a new delight to your hearts and minds, who would transform your whole life, who would give you a new understanding; for someone who would raise you to a new plane of life, who would give you new encouragement, who would set you free—and now look what is happening! Consider, reason with yourselves, and discover in what way that belief has made you different—not with the superficial difference of the wearing of a badge, which is trivial, absurd. In what manner has such a belief swept away all unessential things of life? That is the only way to judge: in what way are you freer, greater, more dangerous to every society which is based on the false and the unessential? In what way have the members of this organization of the Star become different?...

You are all depending for your spirituality on someone else, for your happiness on someone else for your enlightenment on someone else... when I say look within yourselves for the enlightenment, for the glory, for the purification, and for the incorruptibility of the self, not one of you is willing to do it. There may be a few, but very, very few. So why have an organization?...

No man from outside can make you free; nor can organized worship, nor the immolation of yourselves for a cause, make you free; nor can forming yourselves into an organization, nor throwing yourselves into work, make you free. You use a typewriter to write letters, but you do not put it on an altar and worship it. But that is what you are doing when organizations become your chief concern. “How many members are there in it?” That is the first question I am asked by all newspaper reporters. “How many followers have you? By their number we shall judge whether what you say is true or false.” I do not know how many there are. I am not concerned with that. If there were even one man who had been set free, that were enough....

Again, you have the idea that only certain people hold the key to the Kingdom of Happiness. No one holds it. No one has the authority to hold that key. That key is your own self and in the development and the purification and in the incorruptibility of that self

alone is the Kingdom of Eternity....

You have been accustomed to being told how far you have advanced, what is your spiritual status. How childish! Who but yourself can tell you if you are incorruptible?...

But those who really desire to understand, who are looking to find that which is eternal, without a beginning and without an end, will walk together with greater intensity, will be a danger to everything that is unessential, to unrealities, to shadows. And they will concentrate, they will become the flame, because they understand. Such a body we must create, and that is my purpose. Because of that true friendship—which you do not seem to know—there will be real cooperation on the part of each one. And this not because of authority, not because of salvation, but because you really understand, and hence are capable of living in the eternal. This is a greater thing than all pleasure, than all sacrifice.

So those are some of the reasons why after careful consideration for two years, I have made this decision. It is not from a momentary impulse. I have not been persuaded to it by anyone—I am not persuaded in such things. For two years I am not persuaded in such things. For two years I have been thinking about this slowly, carefully, patiently, and I have now decided to disband the Order, as I happen to be its Head. You can form other organizations and expect someone else. With that I am not concerned, nor with creating new cages, new decorations for those cages. My only concern is to set men absolutely, unconditionally free.

3. 星の教団解散宣言 (日本語訳)

今朝、私たちは「星の教団」の解散について話しあおう。よろこぶ人々もいるだろうし、悲しむ人々もいるだろう。それはよろこぶことでも悲しむことでもない。なぜなら、それは避けられないからである。その理由を説明しよう。

私は主張する。真理は道のない地である。人は、いかなる道によっても、いかなる宗教によっても、いかなる宗派によっても、それに近づくことはできない。これが私の見解であり、絶対的に、無条件に、私はこれを固守する。真理は、限りがなく、無条件であり、どのような道によっても近づくことのできないものであり、それは組織化され得ない。何らかの特別な道に沿って人々を導き、あるいは強制するためのどのような組織もつくられるべきではない。まず、そのことを理解するならば、ひとつの信念を組織化することがどれほど不可能であるかということに気づくだろう。ひとつの信念はあくまで一人の人間にかかわる問題であり、あなたがたはそれを組織化することはできないし、してはならない。もしそうするならば、それは死んでしまい、結晶化するだろう。それは他の人々に押しつけられるようなひとつの信条、ひとつの

宗派、ひとつの宗教になるだろう。

これは世界中のみんながしようとしていることである。真理は狭め貶められ、弱い人々、たまたま満たされていない人々のなぐさみものにされている。真理は下げ降ろすことはできない。むしろ一人ひとりがそれに昇る努力をしなければならない。人は山の頂きを谷に運び降ろすことはできない……。

そう、それがなぜ星の教団が解散されるべきかという私から見た第一の理由である。にもかかわらず、おそらくあなたがたは他の教団をつくり、真理を求める他の組織に属しつつけるだろう。私は霊的な類いのどんな組織にも属したくない。どうか、これを理解していただきたい……。

もし一つの組織がこの目的のためにつくられるならば、それはまづば杖、弱点、束縛となり、一人ひとりを不自由にし、人が成長し独自性を確立するのを妨げるにちがいない。人の独自性は、その絶対的で無条件な真理を自分の力で見つけることにある。これが、私がたまたま星の教団の長であるときにこれを解散すると決意したもう一つの理由である。

これは偉業などではない。なぜなら、私は信奉者を欲しないからである。あなたがたがだれかについて行くやいなや、あなたは真理を追うのをやめる。私はあなたが私の言うことに注意を払おうと払わまいと関心はない。私は世界においてあることをしたい。ゆるぎなく専心して、私はそれをするつもりである。私は本質的なただ一つのことだけにかかわっていく。人間を自由にするのである。私は人をすべての檻から、すべての恐れから、自由にしたい。新しい宗教や宗派を興すのでもなく、新しい理論や新しい哲学を打ち建てるのでもなく。あなたがたは当然、それではなぜ私は世界をめぐる、たえず話すのかと私に尋ねるだろう。私がそうする理由をあなたがたに話そう。それは私が信奉者を欲しいからでも、並はずれた弟子をもつ特別な集団を欲しいからでもない。(人は自分が他の人と同じでないことをどれほどよろこぶことか、そのちがいがどんなに滑稽で、ばかげていて、些細なものであっても。私はそんなばかばかしいことを奨めたくない。)私は、霊的な世界においても、この世界においても、弟子も使徒ももたない。

お金の魅力も快適な生活を送りたいという欲望も、私を魅きつけない。もし私が快適に暮らしたいのなら、私はキャンプに来ないだろうし、湿気の多い国にも住まないだろう。私は包みかくさずに話している。なぜなら、私はこれできっぱりと終わりにしたいからである。私はこういった子供じみた議論を年々歳々したくない。

私にインタビューした新聞記者は、何千人ものメンバーをもつひとつの組織を解散することを偉大な行為だと考えていた。彼にとってそれは偉業だった。だから、彼はこういった。「あなたはこれからどうするつもりなのですか。どのようにして生きていくのですか。あなたは弟子をもたないし、人々はもはやあなたに耳を傾けないでしょう」。永遠であるものに耳を傾ける人が、永遠であるものに向かって生きる人が、永遠であるものを見ようとする人が五人いるだけ

で、じゅうぶんである。理解しない人々、偏見にどっぷり浸かった人々、新しいものを欲することもなく、それどころか新しいものを不毛でよんだ彼ら自身に合うように解釈しようとする人々を何千人ももつことが何になるのだろう。

私は、自由で、条件づけられておらず、全的な、部分でもなく相対的でもない、永遠である全的な真理であるから、私を理解しようとする人々、自由である人々を私は望む。私にしたがう人々ではない。一つの檻になるであろう一つの宗教、一つの宗派を私からつくる人々でもない。むしろ人々はすべての恐れから自由であるべきである。すなわち、宗教への恐れ、救済への恐れ、霊的な恐れ、愛への恐れ、死への恐れ、生それじたいへの恐れから。一人のアーティストが絵を描くのは、彼はそうして描くことにおいてよろこびを得ているからであり、それが彼の自己表現、彼の誇り、彼の幸福であるからである。だから、私はこれをするのであり、だれかになにかを求めるからではない。あなたがたは権威、あるいは権威的な雰囲気慣れている。権威が自分たちを霊的なものに導くであろうと考える。あなたは、他の人が超能力、すなわち奇跡によって、自分たちを永遠の自由な世界、すなわち「幸福」へ運んでくれると考えており、また望んでいる。あなたがたの人生観全体がそうした権威に基づいている。

あなたがたは三年間、私に耳を傾けてきた。が、ごく少数の人をのぞけば、何の変化も起きていない。さあ、私が何を言っているのか、注意深くよく調べてごらんください。あなたがたが徹底的に、根本から理解するように……。

十八年の間、あなたがたはこの出来事のために、世界教師の到来のために準備してきた。十八年間、あなたがたは準備し、探しつづけてきた。あなたがたの心と精神に新しいよろこびを与え、あなたがたの生全体を変え、あなたがたに新しい理解をもたらすだれかを。あなたがたを生の新しい地平へと引き上げてくれるだれかを、あなたがたに新鮮な励ましを与え、あなたがたを自由にしてくれるだれかをさがしてきた。だが、いま起きていることを見てごらんください。立ちどまってよく考えなさい。自分で考え出さなさい。見つけなさい。どのような点においてその信仰があなたがたを変わせたのかを。バッジを付けるというような、取るに足りないばかげた表面的な変化ではなく。その信仰は生の本質的でないことすべてをどういうふうに一掃してしまったのか。それが判断するただ一つの方法である。虚偽や本質的でないものを基にしたあらゆる社会に対して、どのようなし方で、あなたがたがより自由になり、より大きくなり、より危険なものになったのか。どのような点において、星の教団のメンバーは以前とちがうようになったのか……。

あなたがたは自分の霊的なものを他のだれかに、自分の幸せを他のだれかに、自分の開悟を他のだれかにすっかり頼りきっている。私はあなた自身の内に悟りを、栄光を、清明を、純正で不屈の自己をさがしてごらんくださいという。しかし、あなたがたのだれもそうしようとはしない。ほんの何人かはいるかもしれない。だが、ほんの、ほんのわずかである。では、なぜ組織はあるのだろうか……。

だれもあなたを外側から自由にすることはできない。組織化された崇拜も、大義への自己犠牲も、あなたを自由にすることはできない。組織に自分を合わせることも、仕事に打ちこむこともあなたを自由にしない。人はタイプライターを使って文字を書く。だが、人はそれを祭壇の上には置かないし、それを崇拜しない。しかし、それこそ、組織が主な関心事となったときに、あなたがしていることなのである。「メンバーは何人いるのですか」。それがすべての新聞記者が私に尋ねる最初の質問である。「あなたは信奉者を何人おもちですか。あなたのおっしゃることの真偽はその数によって判断されるでしょう」。何人いるのか私は知らない。私はそのことに関心がない。たとえ一人でも自由になった人がいるのならば、それでじゅうぶんである……。

また、あなたがたは、特定の人々だけが「幸福の国」への鍵を握っていると考えている。しかし、だれひとりそれをもっていない。だれもそうした鍵を握るような権威をもっていない。そうした鍵はあなたがた自身の自己であり、その自己の発展と浄化、その純正さの中にだけ「永遠の国」がある……。

あなたがたはどれくらい先へ進んだのか、靈的な位階は何なのかを話すことに慣らされてしまっている。なんとばかげたことか。あなたが純正不屈であるかどうか、あなたでなければそれがあなたに話せるだろうか。

しかし、ほんとうに理解することを望む人々、はじめもなく終わりもない永遠であるところのものを見つけようとしている人々は、より強いうねりをもって歩いて行くだろうし、本質的でないあらゆるもの、現実的でないもの、影でしかないものにとってひとつの危険となるだろう。そして彼らは全力を注ぐだろう。彼らは炎となるだろう。なぜなら、彼らは理解するからである。そのような人を私たちはつくりださなければならない。そしてそれが私の目的である。そうした真の友情によって、あなたがたはそれを知らないようだが、それぞれの立場に立った本物の協力が生まれる。これは、権威によるのではなく、救済によるのではなく、あなたがほんとうに理解するからであり、それゆえ永遠なるものにおいて生きることができる。これはどんなよろこびよりも、どんな犠牲よりも大きなことである。

以上が二年間、注意深く考えたうえで、私が決断を下したいくつかの理由である。それは一時の衝動によるものではない。私はだれからも説得を受けていない。私はそのようなことを説得されない。二年の間、私はこれについてゆっくりと、注意して、忍耐強く考えてきていた。そして、私はいま、私がたまたまその長である教団を解散することを決めた。あなたがたは他の組織をつくることのできるし、他のだれかに期待を寄せることができる。私はそうしたことに関心はない。新しい檻やそうした檻の新しい飾りをつくることにも関心がない。私のただ一つの関心事は、人間を完全に無条件に自由にすることである。

4. QUESTIONS AND ANSWERS

At the beginning of a question and answer meeting at Brockwood Park Krishnamurti said:

To quest is to seek. Together we are going to seek, find, discover the right answer. This is not the Delphic Oracle! Together we are going to find out the meaning and significance of the question and also seek the answer. There is no authority here. I happen to sit on a platform for convenience so that everybody can see, but that little height does not give me any authority whatsoever.

4. 『問いとこたえ』（日本語訳）

Brockwood Park の集会で、問いとこたえのやりとりがはじまる際、クリシュナムルティはこう言った。「問うことは探すことである。私たちはいっしょに探しに行き、見つけ、正しいこたえを発見しよう。これはデルフォイの神託ではない。私たちは問いの意味と重要性をいっしょに見つけ出そう。そしてまた、こたえを探そう。ここには権力は存在しない。私が演壇に座っているのはみなさんが見ることができるようにであって、すこし高いということは私に何の権力もまったく与えない」。

1 THE SELF

Question: Is it possible ever to be free of self-centred activity? Is there a real self apart from the self-created image?

What do we mean by the self? If you ask somebody what the self is, he would say, “It is all my senses, my feelings, my imagination, my romantic demands, my possessions, a husband, a wife, my qualities, my struggles, my achievements, my ambitions, my aspirations, my unhappiness, my joys” —all that would be the self. You can add more words but the essence of it is the centre, the ‘me’, my impulses—“I am impelled to go to India to find truth” and so on. From this centre all action takes place; all our aspirations, our ambitions, our quarrels, our disagreements, our opinions, judgements, experiences, are centred in this. This centre is not only the conscious self acting outwardly but also the deep inner consciousness which is not open and obvious: it is all the different levels of consciousness.

Now the questioner asks: Is it possible to be free of this centre? Why does one want to be free of it? Is it because the centre is the cause of division? That is, the ‘me’ is the active

element that is operating all the time; it is the same 'me' with different names, with a different coloured skin, with a different job, with a different position in the hierarchical social structure—you are Lord so-and-so, somebody else is a servant—it is the same 'me' dividing itself into all these different categories—socially, economically and religiously.

Where there is this division there must be conflict—the Hindu as opposed to the Muslim, the Jew, the Arab, the American, the English, the French. That is physically obvious and it has brought about tremendous wars, great agony, brutality and violence. The self identifies with an ideal—noble or ignoble—and fights for that ideal. But it is still 'the ego trip'. People go to India trying to find spirituality; they put on different fancy dress but they have only changed the garb, the clothes; essentially they are each the 'me' operating, all the time struggling, endeavouring, grasping, denying, being deeply attached to their experiences, ideas, opinions and longings. And as one lives one observes that this centre, this 'me', is the essence of all trouble. Also one observes that it is the essence of all pleasure, fear and sorrow. So one asks, "How am I to get rid of this centre so as to be really free—absolutely, not relatively?" It is fairly simple to be relatively free; one can be a little unselfish, a little concerned with social welfare, with the difficulties of others, but the centre is always there biting hard, brutal.

Is it possible to be absolutely free of that centre? First of all see that the greater the effort that is made to be free of the centre, the more that very effort strengthens the centre, the self. For those who go off into meditation of various kinds, trying to impose something upon themselves, the 'me' that identifies with that effort is captured by that and says: "I have achieved", but that 'me' is still the centre.

To be free there must be no effort; which does not mean doing what one likes. For that is still the movement of the self.

So what is one to do? If you are not to make an effort, because you see the truth that the more effort you make the greater the travail of the centre, then what is one to do?

The questioner asks: Is there a real self apart from the self created by thought with its images? Many people ask that. The Hindus have said that there is a highest principle which is *the* self. We imagine also that there is a real self apart from the 'me'. You all, I am sure, feel there is something else beyond this 'me', which has been called the higher self, the sublime or the supreme self. The moment we use the word 'self', or use any word to describe that which is beyond the self, the 'me', it is still the self.

Is it possible to be free of the self?—without becoming a vegetable, without becoming absent-minded, somewhat mad? Which means: is it possible to be totally free from

attachment?—which is one of the attributes, one of the qualities, of the self. One is attached to one's reputation, to one's name, to one's experiences. One is attached to what one has said. If you really want to be free of the self it means no attachment; which does not mean you become detached, indifferent, callous, shut yourself away, which is another activity of the self. Before, it was attached; now it says, "I won't be attached". That is still the movement of the self.

When you are really, without effort, deeply, basically, not attached, then from that deep sense of no attachment comes responsibility. Not responsibility to your wife, to your children, but the deep sense of responsibility. Will you do it? That is the question. We can talk everlastingly, put it into different words, but when it comes to testing it, acting, we do not seem to want to do it; we prefer to go on as we are, with the *status quo* slightly modified but carrying on with our quarrels.

To be free from your own experience, from your own knowledge, from your own accumulated perception—it is possible if you go at it. And it does not take time. That is one of our excuses: we must have time to be free. When you see that one of the major factors of the self is attachment and you see what it does in the world, and what it does in your relationship with another, quarrels, separation, all the ugliness of relationship if you see the truth of attachment, then you are free from it. Your own perception sets you free. Will you do it?

1 自己

問い：自己中心的な(=self-centred)活動をしなくなることはほんとうに可能なのですか。自分が自分に対してつくっている自分のイメージ(=the self-created image)とは別にほんとうの自己(=a real self)があるのですか。

自己(=the self)とは何を指すのか。自己とは何ですか、とだれかに尋ねれば、尋ねられた人は「私の感覚、私の感情、私の想像力、私の表現力、夫、妻などの占有物、私の特質、私のもがき、私の業績、私の野望、私の大望、私の悲しみ、私のよろこび、それらすべてが自己です」とこたえるだろう。これらにいくつかのことばを加えることもできるが、自己の本質はセンター(=the centre)、「私(='me')」、さまざまな私の衝動にある。「私はかりたてられるようにしてインドへ行き、真理を見つけた」というように。すべての行動はこのセンターから起る。大望、野望、けんか、不和、意見、判断、経験、これらはすべてここを中心に行っている。この中心は外にはたらきかける意識的な自己であるだけでなく、閉じていてはっきりしない深い内的な意識でもある。それはちがったレベルの意識全てである。

さて、質問者はこう尋ねている。このセンターから解放されることのできるのですか、と。なぜ、そこから自由になりたいのか。それこそが分断(=devison)を生み出すからか。すなわち、「私」はつねに作動している活動的な要素である。名前がちがってしようと、肌の色がちがおうと、仕事がちがおうと、あなたがなんとか脚で彼が召使いであっても、社会の中でどの階層にしようとも、同じ「私」である。社会的、経済的、宗教的に、さまざまなカテゴリーに分かれるのも同じ「私」なのである。

この分断のあるところには必ず衝突がある。イスラム教徒と対立するヒンドゥー教徒のように、ユダヤ人、アラブ人、アメリカ人、イギリス人、フランス人。どう見ても明らかだが、それは大きな戦争や多大な苦痛、残虐行為、暴力を引き起こした。気高いとか下劣であるとかいう理想に自己は同一化し、自己は理想のためにたたかう。しかし、それはやはり「エゴの旅(=the ego trip)」である。スピリチュアルな、靈的なものに会いたいとインドへ行く人々。彼らはちょっと変わった服を着ているが、彼らは服の様式、服装を変えただけである。本質的には、それぞれの中ではやはり、「私」がはたらいている。それはいつももがいていて、努めていて、握っていて、認めようとせず、自分の経験や考え、意見、あこがれにしがみついて(=be attached)いる。ある人は生きながら、このセンターである「私」がすべてのトラブルのもとであることに気づく。また、ある人はこの「私」がすべてのよろこび、恐れ、悲しみのもとであることに気づく。そして、ある人は尋ねる。「相対的ではなく、完全に、真に自由になるために、この「私」を捨てるには私はどのようにすればいいのですか」と。相対的に自由になることは難しいことではない。すこし利己的であることをやめ、社会福祉に関心をもち、難儀している人々をたすければいい。しかし、センター「私」はつねに、冷酷にしつこく食らいついている。

そのセンターからまったく自由になることはできるのだろうか。何よりもまず、センターから自由になるためになされる努力が大きくなればなるほど、その努力がますますセンター、つまり自己を強くするということがある。自分自身になにかを課すことでがんばり、さまざまな種類の瞑想へとすすんでいく者は努力に同一化する「私」につかまり、こういう。「成し遂げた」と。だが、そういう「私」がなおセンターにある。

自由であるならば努力はいらないはずである。といっても、好きなことをしていいということにはならない。それもまた、やはり「私」の運動だからである。

では、何をすればよいのか。努力すればするほど「私」のはたらきは大きくなると気づいたのだから、努力すべきでないとなれば、何をすればよいだろうか。

質問者はこう尋ねている。思考がイメージによって作りあげた自己とは別に、ほんとうの自己があるのですか、と。多くの人々が同じことを尋ねるだろう。最高の原理があり、それが自己であるとヒンドゥー教は説いてきた。人はまた、「私」とは別にほんとうの自己があると思う。人はみな、この「私」を越えたところになにか、より高い自己、崇高な自己、この上ない

自己と呼ばれているようななにかがあるような気がしている。そうでしょう。「自己」ということばを使うとき、あるいは「私」、自己を越えたなにかを表現するために何らかのことばを使うとき、もうそれは自己なのである。

自己から解放されることは可能だろうか。野菜のようにならず、放心もせず、すこしおかしくなるということもなく。このことはいいかえれば、執着（=attachment）から完全に自由になることは可能だろうか、ということでもある。執着は自己がもっている属性の一つでもあり、特質の一つでもある。人は自分の評判や自分の名前、自分の経験に執着する。もしほんとうに自己から解放されたいと思うのなら、それは何にも執着しないということを意味する。このことは無関心になったり、冷淡になったり、無神経になったり、引きこもってしまったたりするというのではない。それは自己のもう一つの活動である。以前は執着していたが、いまこういう。「私は執着しようとは思わない」。だが、これはまだ自己の運動なのである。

努力なく、深く根本から、真に何にも執着していないとき、その執着心のない深い感覚から責任が生じてくる。妻や子供に対する責任ではなく、もっと深い責任の感覚である。さあ、あなたはどうしますか。それが問題です。私たちはちがったことばを置き換えることで永遠に話しつづけることができるが、それをテストしてみる、やってみるとなると、人は実際にそうすることを望まないようである。人は現状をわずかに変えるだけで、現在のままの自分たちがつづくことを好む。しかし、争いもまたつづくのである。

あなたの経験やあなたの知識、あなたに蓄積されている知覚から自由であること、それはもしあなたがとりかかるとなると可能である。大した時間はかからない。自由になるには時間がかかる、それは人のいいわけの一つである。自己のもつ大きな要素の一つが執着であるということ、また、それが世界において何をしているのか、他の人との関係やいさかい、分裂など関係におけるあらゆる醜さにおいて、どういうことをしているのかということに気づけたならば、執着のほんとうのすがたを見るならば、そのとき、人は自己から自由なのである。あなた自身の気づき（=perception）があなたを自由にする。さあ、やってみませんか。

2 SECURITY

Question: Can there be absolute security for man in this life?

This is a very serious question; we all want security, both physical and principally, psychological. If we were psychologically secure, certain, then we might not be so concerned with physical security. The search for psychological security is preventing physical security.

The questioner asks: Is there absolute security for us human beings? We must have security, like a child clinging to its mother; if the mother and the father do not pay enough

attention to the baby, do not give it affection and care, then the brain and nerves of the baby are affected. The child must have physical security. Now, why do we demand psychological security? There is the psyche, demanding security; but is there psychological security at all? We want security in our relationships—my wife, my children, the family unit. In that attachment we think there is a certain security, but when we find that there is no security there we soon break away and try to find it elsewhere.

We try to find security in a group, in the tribe—that glorified tribe that is the nation. And yet that nation is against another nation. Thinking that security, psychologically, is in a person, in a country, in a belief, in your own experience, is the same as demanding physical security. In demanding psychological security we have divided ourselves: the Hindu, the Muslim, the Jew, the Arab, the believer in Jesus, the believer in something else—in all of them there is the demand for security. Psychological security has been sought in these illusions; the various illusions of being secure in Catholicism, in Buddhism, in Hinduism, in Judaism, Islam and so on which have created nothing but illusory securities because they are all fighting each other. The moment you see this you do not belong to anything. When you see the truth that the mind, or thought, has sought security in illusions, that very perception brings intelligence.

One seeks security in one's belief in Hinduism and in being a Hindu, with all the nonsensical superstitions and gods and rituals that are involved. But that opposes another group of people who have different superstitions, different gods, different rituals. These two opposing elements may tolerate each other but they are essentially antagonistic. There is conflict between the two and one has sought security in the one or the other. And then one realises that they are both based on illusions. To see that, is intelligence; it is like seeing a danger. A man who is blind to danger is an idiot, there is something wrong with him. But one does not see the danger of these illusions in which one seeks security. The man in whom intelligence is in operation sees the danger. In that intelligence there is absolute security. Thought has created all the various forms of illusion—nationalities, class, different gods, different beliefs, different dogmas, different rituals and the extraordinary religious superstitions that pervade the world—and in them it has sought security. And one does not see the danger of this security, of this illusion. When one sees the danger—not as an idea but as an actual fact—that seeing is intelligence, the supreme form of absolute security. So there *is* absolute security: it is to see the truth in the false.

2 安全

問い：人にとって、生涯にわたる完全な安全というのはいくらあるのですか。

これはたいへん深い問いである。人はみな、身体的な安全と、中でも心理的な安全の、二つの安全を得たい。もし心理的に安全であるなら、人はそれほど身体的な安全にこだわらない。心理的な安全を求めることは身体的な安全を妨げている。

質問者は尋ねている。私たち人間にとって完全な安全はあるのか、と。人は母親にまわりつく子供のようにまもられていなければならない。もし、母親と父親が赤ん坊にじゅうぶんな注意を払わなければ、愛情や手をかけなければ、赤ん坊の脳と神経は冒される。子供は身体的にまもられていなければならない。では、なぜ人は心理的な安全を求めるのか。心があって、安全を欲しがらる。しかし、一体、心理的な安全があるだろうか。妻や子供、家族の絆など、人は関係において安全を求める。人はその結びつき(=attachment)があると確かに安全があると考えが、そこに安全がないと気づくと、人はすぐに逃げ出し、他のどこかでそれを見つけ出そうとする。

集団の中で、部族の中で、人は安全を見つけようとする。そして、栄光ある部族は国家であり、しかもその国家は他の国家と対立する。ある人に、ある国家に、ある信仰に、自身の経験の中に、心理的な安全があると考えすることは、身体的な安全を要求することとまったく同じことである。心理的な安全を求めながら、人々を分断してきたのである。ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、アラブの人々、キリストを信じる人々、なにかの信仰者、こういったことのすべてに安全への要求が含まれている。心理的な安全はこれらの幻想の中で求められてきた。カソリック教、仏教、ヒンドゥー教、ユダヤ教、イスラム教などにおける安全へのさまざまな幻想が架空にすぎない安全をつくりだしてきたのである。なぜなら、それらは互いにたたかっているのだから。このことを見るとき、そのとき、人は何にも属していない。精神(=mind)、あるいは思考(=thought)が幻想の中で安全を求めてきたという真実を見るとき、その気づきこそが知性(=intelligence)をもたらすのである。

人はヒンドゥー教を信じることで、またヒンドゥー教徒であることで自分の安全を求め、そこには自分が傾倒しているまったく無意味な迷信や神や儀式がともなわれている。しかし、このことは別の迷信、別の神、別の儀式をもつ別の人々の集団と対立する。対立するこれら二つは、互いに我慢しあうかもしれないが、本質的には相入れない。両者の間には衝突があり、人々はどちらか一方に安全を求めてきた。そして、人は両者どちらもが幻想の上に立っているということに気づく。そのことを見ることが知性であり、それは危険を見るようなものである。この危険に気づかない人はバカ(=idiot)であり、どこかおかしい。だが、人はそこに安全を求めている幻想の危険に気づかない。知性が現にはたらいっている人は危険に気づく。その知性の中に完全な安全がある。思考はさまざまな形態の幻想をつくりだしてきた。国家や階級、さま

さまざまな神，さまざまな信仰，さまざまな教条，さまざまな儀式，世界にはびこっている途方もない宗教的迷信など，それらの中で安全は求められてきた。そして，人々はこの安全の，この幻想のもつ危険を見ないのである。一つのアイデア(=idea)としてではなく，現実の事実(=actual fact)として，この危険に人が気づくとき，この気づきが知性であり，完全な安全の上ないかたちなのである。完全な安全はある。虚偽の中で真実を見ることである。

3 EMOTION

Question: Emotions are strong. Our attachments are strong. How does looking and seeing reduce the strength and power of these emotions?

Trying to control, suppress, or sublimate emotions and attachments in no way reduces the conflict, does it? Are one's emotions so extraordinarily strong that they act? First one has to be conscious, aware, to know or recognise, to see, that one's emotions are strong and also that one is attached. When one is so conscious, what takes place?

One is conscious of one's attachment, or of one's strong emotions of hate, jealousy, antagonism, like and dislike. Now, do they, being so strong, overshadow and control one's actions? One is examining, looking at the emotions and attachments which are apparently very strong and one sees that they act as barriers to clear unconfused thinking, to clear action. Is one aware of that or does one take it for granted? Does one say, "Yes, I have very strong emotions, I am terribly attached, but it does not matter. It is part of life. I do not mind struggling. I do not mind having quarrels with everybody"? Now when one says one is aware, what does one mean by that—to know, to recognise? Is thought recognising the attachment? One says, "Yes, I am attached"—is it the activity of thought that says, "I am attached"?

When one says, "I am attached", is it an idea or is it a fact? The fact is not the idea. This microphone: I can create an idea of it but the microphone is a fact. I can touch it, see it. So, is my attachment a concept, a conclusion, or is it a fact? Now, when you observe the fact, not the idea, not the conclusion about the fact, but the fact itself, is the fact different from you who are observing the fact?

When you are observing the fact through an idea, or through a conclusion that you have heard from somebody, you are not looking at the fact. If you are looking at the fact you are not verbalising the fact. So, how do you look at it? As something separate from yourself? Is attachment something different from yourself or is it part of yourself? The microphone is something apart from yourself, but attachment, the emotion, is part of

yourself. Attachment is the 'me'. If there is no attachment there is no 'me'. So awareness of your emotions, your attachments, is part of your nature, part of your structure. If you are looking at yourself there is no division, there is no duality as the 'me' and attachment. There is only attachment, not the word but the fact, the feeling, the emotion, the possessiveness in attachment. That is a fact; that is 'me'.

So, what am I to do with the 'me'? When there was division between 'me' and attachment I could try to do something about it: I could try to control it, I could say, "I must suppress it",—which we do all the time. But if it is 'me', what can I do? I cannot do anything: I can only observe. Before, I acted upon it; now I cannot act upon it because it is 'me'. All I can do is observe. Observation becomes all important, not what I do about it.

So there is observation, not, "I am observing". There is only observation. If in that observation I begin to choose and say, "I must not be attached", I have already moved away, I am saying that it is not 'me'. In observation there is no choice, there is no direction, there is just pure, absolute, observation, and then the thing that is being observed dissolves. Before, you resisted it, you controlled it, you suppressed it, you acted upon it; but now in that observation all energy is centred. It is only when there is the lack of that energy that there is attachment. When there is complete observation without any interference of thought—why should thought come in?—you are just observing as you observe the thing that you call the fly. Just observe in the same way your emotions and attachments: then there is the gathering of all energy in that observation. Therefore there is no attachment. It is only the unintelligent who are attached, it is only those who do not see the full implications of attachment who are attached. They pervade the world, they are the stronger element in the world and we are caught in that. But when you come to examine this closely, then you are no longer caught in that and you are no longer dissipating energy in something which has no meaning. Your energy is now centred completely in observation, therefore there is total dissipation of attachment. Test it, do it and you will find out. You have to examine the thing very, very closely so that your mind is absolutely clear in the observation. It is only the unaware who jump over the cliff. The moment you are aware of danger, move. Attachment is a danger because it breeds fear; anxiety, hate and jealousy, being possessed and being not possessed—the whole of that is a tremendous danger. And when you see that danger there is action.

3 感情

問い：感情 (=emotions) は強い。人の執着 (=attachments) は強い。見ることや気づくこと

は、感情というものがもつ強さと力をどのように減ずるのですか。

感情や執着を支配したり、抑圧したり、昇華させようとするのは、葛藤をすこしも減らしませんね。感情は驚くほど強いからこそ、はたらくのではないか。何よりもまず、人の感情は強いということ、また人は執着しているということ、人は意識し、気づいていなければならず、知っていなければならず、認めなければならず、見なければならぬ。人が意識しているとき、何が起るのか。

人は自分の執着に、あるいは嫌悪や嫉妬、敵意、すききらいという強い感情に気づいている。では、それらはとても強いから、人の行動を影で覆い、人の行動を支配するのか。一見、とても強い感情と執着を、人は調べ、見ている。そして感情が明晰な、混乱していない思考、明解な行動に対するバリアとしてはたらくのを見る。人はそれに気づいているのか。それとも、当たり前のことと思っているか。「ええ、私の感情はとても強いですし、私はひどく執着しています。ですが、それは問題ではありません。それは生の一部(=part of life)です。私はそのものがきを気にしていません。みんなとけんかすることを気にしていません」というのか。では、人は気づいているというとき、そのことによって人が意味するのは、すなわち知っている(=know)、わかる(=recognize)とは何なのか。思考は執着を認めるのか。人はいう。「ええ、私は執着しています」と。だが、「私は執着している」といっているのは思考の活動(=the activity of thought)ではないのか。

「私は執着している」と人がいうとき、それは考え(=idea)なのか、それともそれは事実(=fact)なのか。事実は考えではない。このマイク、私はその観念(=idea)をつくりだすことができるが、マイクは事実である。私はそれに触れることができ、見ることができる。さて、私の執着は概念、結論であるのか、それともそれは事実であるのか。人がある事実を観察し(=observe)しているとき、観念ではなく、そのある事実についての結論ではなく、その事実それじたいを観察しているとき、その事実はその事実を観察している人とは異なるのか。

人がだれかから聞いた一つの観念や一つの結論を通して事実を観察するとき、人はその事実を見ていない。もし人がその事実を見ているのなら、人はその事実をことばにしていない。さて、人はそれをどのように見るか。なにか、その人自身から離れているものとして見ますか。執着はその人自身と異なるなにかなのか。それとも、それはその人自身の一部であるのか。マイクは人とは別のなにかである。しかし、執着、感情は人の一部である。執着は「私(=me)」である。執着がなければ、「私」はない。そう、自分の感情、自分の執着に気づいていることは、人の本質、人のしくみの一部なのである。もし人が自分自身を見ているならば、分断はなく、「私」と執着という二元性はない。ことばではなく、執着という事実があるだけである。執着の中に情緒(=the feeling)、感情、所有(=the possessiveness)がある。それが事実であり、それが「私」なのである。

では、人は「私」にどう対処すべきか。「私」と執着の間で分断があるとき、人はそれに対してなにかしようとするだろう。人はそれを支配しようとするかもしれないし、「それを抑えなければならぬ」というかもしれない。それは人々が四六時中しているのだが。しかし、もしそれが「私」であるのなら、人は何ができるか。人は何もできない。人は観察だけができる。以前はそれに対してなにかした。いまはそれが「私」であるから、人はそれに対して何もすることができない。人ができるのは観察だけなのである。人がそれに何をするかではなく、観察がなによりも重要になる。

さて、観察がある。「私は観察している」のではなく。観察だけが起きている。その観察において、人が選択し(=choose)はじめ、「私はそれに執着してはならない」というならば、人はすでに立ち退いてしまっており、それは「私」ではないとその人はいう。その観察において、選択がなく(=no choice)、方向づけがなく(=no direction)、純粹で完全な観察(=just pure, absolute, observation)がある。そのとき、観察されているものごとは消える。以前は、それに抵抗し、それを支配し、それを抑え、それになにかした。だが、いまは、その観察においてすべてのエネルギーが集中している。そのエネルギーに不足があるときにだけ、執着が起こるのである。思考による何の干渉もなく、完全な観察があるとき、どうして思考が入りこんでこようか。人はハエと人々が呼んでいるものを観察しているように、ただ観察しているのである。それと同じように、自分の感情や執着をただよく見なさい。そのとき、その観察においてすべてのエネルギーが集まっている。それゆえに、執着は起こらない。知性をもたない人々だけが、執着というものがどんな含みをもっているかを見ることができない人々だけが、執着するのである。彼らは世界にはびこっており、世界においてより強力な要素である。そして、人々はそれにとらえられる。しかし、このことを注意して調べるようになると、人はもはやそれにとらわれなくなり、無意味なことにエネルギーを無駄遣いしなくなる。人のエネルギーは観察することに完全に集中しており、それゆえに、いまは執着は完全に消えてしまう。それを試してごらんください。やってみてください。そうすれば見つけ出すであろう。その観察において人の心が完全に透きとおる(=absolutely clear)ほどに、人はものごとをととてもとても間近で(=closely)調べなければならない。崖から飛び降りるのは気づいていない人だけである。危険に気づいた瞬間、人は動く。執着は一つの危険である。なぜなら、それは所有されている、所有されていないという恐れや心配、嫌悪、嫉妬を育てる。そのこと全体が大きな危険である。そして、人がその危険を見るとき、行動が起きる。

4 WORDS

Question: Why does the mind so readily accept trivial answers to deeply felt problems?

Why does one accept a trivial explanation where a deep problem is concerned? Why does

one live in words? That is the real problem. Why have words become so immensely important? One suffers, goes through great agonies and someone comes along and gives explanations and in these explanations one seeks comfort. There is god, there is reincarnation, there is this, there is that, there is something else. One accepts the word, the explanation, because it gives one comfort; the belief gives one comfort when one is in agony, in a state of anxiety. The explanations by philosophers, by psychologists, by priests, by gurus and teachers—it is on these that one lives; which means that one lives second-hand. One is a second-hand person and one is satisfied. The word 'god' is a symbol. Symbols become extraordinarily important, like the flag. Why does the mind do this? One reads a great deal about what other people have thought; one sees on the television what is taking place. It is always others, somebody else out there, telling one what to do. One's mind is crippled by this and one is always living at second-hand.

One has never asked: "Can I be a light to myself—not the light of someone else, the light of Jesus or the Buddha?" Can one be a light to oneself? Which means that there is no shadow, for to be a light to oneself means it is never put out by any artificial means, by circumstances, by sorrow, by accident. Can one be that to oneself? One can be that to oneself only when one's mind has no challenge because it is so fully awake.

But most of us need challenges because most of us are asleep—asleep because we have been put to sleep by all the philosophers, by all the saints, by all the gods and priests and politicians. One has been put to Sleep and one does not know that one is asleep: one thinks that is normal. A man who wants to be a light to himself has to be free of all this. One can be a light to oneself only when there is no self. Then that light is the eternal, everlasting, immeasurable light.

4 ことば

問い：なぜ心はこうもたやすく、深いと感じられる問題に対して、つまらないこたえを受け入れるのですか。

なぜ人は根深い問題を考えあぐねているところへつまらない説明を受け入れるのか。なぜ人はことばを住处（すみか）とするのか。このことこそ、まったく問題である。なぜことばはこれほどまでに重要になったのか。ある人は悩んでいて、苦痛を耐えしのんでいる。そこへだれかがやってきて、説明をする。その説明の中に人はなぐさめを求める。神がいる、生まれ変わりがあある、これがある、あれがある、なにかあある。人はことば、説明を受け入れる。なぜなら、ことばは人をなぐさめてくれるからである。人に悩みがあるとき、心配でいるとき、信仰は人

をなくさめる。哲学者、心理学者、聖職者、グル、先生による説明、人が生きているのはこれらの説明に基づいてである。そしてこのことは、人が受け売りの(=second-hand)生を生きているということの意味する。人は受け売りの人である。そして、人は安心する。「神」ということばは一つのシンボルである。シンボルは、旗と同様に、とてもとても重要になった。なぜ心はこんなことをするのか。人は他の人々が考えてきたことを読みあさる。また、テレビで起きていることを見る。何をすべきか告げているのはいつも、そこにいないだけかである。人の心はこういったことにとらえられていて、人はいつも受け売りで生きている。

人がこう尋ねたことなどない。「自分が自分自身にとっての光(=a light to myself)でありうるのか。他のだれかやキリストや釈迦の光がではなく」。自分は自分自身にとっての光となりうるのか。それは何の影もないということでもある。というのも、自分が自分にとっての光であるということ、それは人工的な手段、境遇、悲しみ、偶然にも、決して消されることはないということだからである。人は自分に対し、そのようであれるだろうか。人の心が何の課題も抱えていないときにだけ、人はそのようになりうる。そのとき、心はじつに、まったく目覚めている(=is awake)からである。

しかし、大半の人は挑む必要がある。彼らは眠っている(=is asleep)からである。すべての哲学者、すべての聖人、すべての神や聖職者、政治家たちに、人は眠るようにしむけられてきた。人は眠るようにしむけられてきており、また、人は自分たちが眠っているということを知らない。人はそれをふつうだと思っている。自分が自分自身にとっての光であろうとする人はこれらすべてから自由にならなければならない。私がない(=there is no self)ときにだけ、人は自分が自分自身にとっての光となりうる。そのとき、その光は永遠、不朽の、果てしない光である。

5 INSIGHT

Question: Is not insight intuition? Would you discuss this sudden clarity which some people have. What do you mean by insight and is it a momentary thing or can it be continuous?

In the various talks the speaker has given he has used the word 'insight'. That is to see into things, into the whole movement of thought, into the whole movement, for example, of jealousy. It is to perceive the nature of greed, to see the whole content of sorrow. It is not analysis, not the exercise of intellectual capacity, nor is it the result of knowledge. Knowledge is that which has been accumulated through the past from experience, stored up in the brain. There is no complete knowledge, therefore with knowledge there is always ignorance, like two horses in tandem. If observation is not based on knowledge, or on intellectual capacity or reasoning, exploring and analysing, then what is it? That is the

whole question. The questioner asks: is it intuition? That word 'intuition' is rather a tricky word which many use. The actuality of intuition may be the result of desire. One may desire something and then a few days later one has an intuition about it. And one thinks that that intuition is extraordinarily important. But if one goes into it rather deeply one may find that it is based on desire, on fear, or on various forms of pleasure. So one is doubtful about that word, especially when used by those people who are rather romantic, who are rather imaginative, sentimental and seeking something. They would certainly have intuitions, but they would be based on some obvious self-deceptive desire. So for the moment put aside that word intuition.

Then what is insight? It is: to perceive something instantly, which must be true, logical, sane, rational. Insight must act instantly. It is not that one has an insight and does nothing about it. If one has all insight into the whole nature of thinking there is instant action. Thinking is the response of memory. Memory is experience, knowledge, stored up in the brain. Memory responds: where do you live? —you answer. What is your name?—there is an immediate response. Thought is the result or the response of the accumulation of experience and knowledge, stored as memory. Thought is based upon, or is the outcome of, knowledge; thought is limited because knowledge is limited. Thought can never be all-inclusive: therefore it is everlastingly confined, limited, narrow. Now, to have an insight into that, means that there is an action which is not merely the repetition of thought. To have an insight into, say, the nature of organizations means that one is observing without remembrances, without argumentation, pro and con: it is just to see the whole movement and nature of the demand for organization. One has an insight into it, and from that insight one acts. And that action is logical, sane, healthy. It is not that one has an insight and then acts the opposite, then it is not insight.

Have an insight, for example, into the wounds and hurts that one has received from childhood. All people are hurt for various reasons, from childhood until they die. There is this wound in them, psychologically. Now, have an insight into the whole nature and structure of that hurt. You are hurt, wounded psychologically? You may go to a psychologist, analyst, psychotherapist, and he may trace why you are hurt; from childhood, your mother was this and your father was that and so on, but by merely seeking out the cause, the hurt is not going to be resolved. It is there. The consequences of that hurt are isolation, fear, resistance, so as not to be hurt more; therefore there is self-enclosure. You know all this. That is the whole movement of being hurt. The hurt is the image that you have created for yourself about yourself. So as long as that image remains you will be hurt, obviously.

Now, to have an insight into all that—without analysis—to perceive it instantly, then that very perception is insight; it demands all your attention and energy; in that insight the hurt is dissolved. That insight will dissolve your hurt completely, leaving no mark, and therefore nobody can hurt you any more. The image that you had created about yourself no longer exists.

5 洞察

問い：洞察 (=insight) は直観 (=intuition) ではないのですか。いくらかの人々がもっている、この突然の明晰さ (=sudden clarity) について話し合ってくださいませんか。洞察によってあなた (クリシュナムルティ) が意味するのは何ですか。また、それは瞬間的なことですか、それとも継続しうるのですか。

私がしてきたさまざまな話の中で、私は「洞察 (=‘insight’)」ということばを使ってきた。それはものごと、思考の全体的な動き (=the whole movement of thought), たとえば嫉妬の動き全体を見抜く (=see into) ことである。貪欲の実体 (=the nature of greed), 悲しみの中身全体を見る (=perceive) ことである。それは分析ではなく、知的な能力の使用ではなく、知識がもたらす結果でもない。知識は過去からの経験を通して蓄積されてきたもの、脳に蓄えられているものである。完全な (=complete) 知識はない。それゆえ、つねに知識とともに無知 (=ignorance) がある。前後に繋がれた二頭の馬のように。もし観察が、知識あるいは知的な能力、推論や探求、分析に基づかないならば、そのとき、それは何か。それがひとかたまりの問題である。質問者は尋ねている。それは直観ではないのか、と。「直観 (=‘intuition’)」ということばは、多くの人を使う、落とし穴のあるような (=tricky) ことばである。直観の実際は欲望が生み出したものであるかもしれない。人がなにかを欲望する。すると、二、三日後に人はそれについての直観をもつ。そして、人はその直観を異常に重要であると考え。しかし、かなり深く分け入るならば、それは欲望や恐れ、あるいはさまざまなかたちのよろこびに基づいていると人は気づくだろう。特にかなりロマンティックな、想像力に富み、感傷的で、なにかを求めている人々によって使われるとき、そのことばは疑わしい。彼らは確かに直観をもっているだろう。だが、彼らは相当、明らかに自身を隠ぺいする (=self-deceptive) 欲望を根拠としている。さしあたり、直観ということばはわきへやっておきなさい。

では、洞察とは何か。それはなにかを直ちに知覚する (=perceive instantly) ことであるのだが、それは真実で (=be true), 論理的で (=logical), まともで (=sane), 合理的で (=rational) あらなければならない。洞察は必ず瞬間にはたらく。それは、ある人が一つの洞察をもったが何もしなかった、ということにはならない。人が思考の全体的な性質 (=the whole nature of thinking) への洞察をもつならば、そのとき、即座に行為が発生する。思考は記憶の

反応である。記憶は脳に蓄えられている経験であり、知識である。記憶は応答する。あなたはどこに住んでいますか。人はこたえる。あなたの名前は何か。即座に応答が起こる。思考は記憶として蓄えられている経験や知識の蓄積による結果あるいは反応である。思考は知識を根拠としているか、知識の結果である。知識が限られているから、思考は限られている。思考は決して包括的 (=all-inclusive) ではありません。それゆえに、思考は永遠に限られて (=is confined) おり、限定されて (=limited) おり、狭い (=narrow)。そう、それを洞察することは、単に思考の反復 (=repetition) ではない行動を意味する。組織の本質について洞察することは、人が思い出をもたず、賛成及び反対の議論をぬきにして、観察している (=is observing) ことを指す。組織化への欲求の全体的な動きや実体をただ見ること (=just to see) である。人がそれについて洞察する、そして、その洞察から行為が発生する。その動作は論理的で、まともで、健全である。洞察をもち、その反対に行動するというのではない。それは洞察ではない。

洞察をもったとしよう。たとえば自分が幼いころから受けてきた苦痛や傷について。すべての人が子供のころから死ぬまでさまざまな理由で傷ついている。この傷は人々の中に心理的に存在している。さあ、その傷の全体的な本質やしくみについて洞察してごらんください。とてもつらい、心理的に傷ついている、としよう。人は心理学者や分析医、心理療法家に頼るかもしれない。彼らは、なぜその人が傷ついているのかを幼いころからたどるだろう。つまり、あなたの母はこうだった、父はああだった、など。しかし、原因をさがし求めることだけではその傷は消えていかない。それはそこにある。その傷は、それ以上傷つかないために、孤独、恐れ、抵抗へと至る。それゆえ、他者に対して自己を閉じる (=self-enclosure) ようになる。みんな、すべてを知っていますね。それが傷つくということの全体的な動きである。その傷は人が自分自身について自分自身で作りだしてきたイメージである。だから、そのイメージがある限り、人は傷つきつづけるであろう、明らかに。そう、そういったことについて洞察をもつこと、分析ではなく、瞬間的に知覚すること、まさにその知覚 (=perception)こそが洞察なのである。それは人の全注意と全エネルギーを要する。そうした洞察において、傷は解消される。その洞察は人の傷を完全に解消するだろう。何の跡形もなく。それゆえに、だれももう人を傷つけることはできない。人が自分自身について作りだしてきたイメージはもはや存在しないのである。

6 EDUCATION

Question: What is the significance of history in the education of the young?

If one has read history it is fairly clear that man has struggled against nature, conquered it, destroyed and polluted it; man has struggled against man; there have always been wars.

Man struggles to be free and yet he becomes a slave to institutions and organizations from which in turn he tries to break away, only to form another series of institutions and organizations. There is an everlasting struggle to be free. The history of mankind is the history of tribal wars, feudal and colonial wars, the wars of the kings and nations; and it is all still going on; the tribal mind has become national and sophisticated—but it is still the tribal mind. The history of man includes its culture; it is the story of the human being who has gone through all kinds of suffering, through various diseases, through wars, through religious beliefs and dogmas, persecution, inquisition, torture in the name of god, in the name of peace, in the name of ideals.

And how is all that to be taught to the young? If it is the story of mankind, the story of human beings, then both the educators and the young are the human beings: it is their story, not merely the story of kings and wars, it is a story of themselves. How can the educator help the student to understand the story of himself, which is the story of the past, of which he is the result? That is the problem. If you are the educator and I am the young student, how would you help me to understand the whole nature and structure of myself—myself being the whole of humanity, my brain the result of many million years? It is all in me, the violence, the competition, the aggressiveness, the brutality, the cruelty, the fear, the pleasure and occasional joy and that slight perfume of love. How will you help me to understand all this? It means that the educator must also understand himself and so help me, the student, to understand myself. So it is a communication between the teacher and myself: and in that process of communication he is understanding himself and helping me to understand myself. It is not that the teacher or the educator must first understand himself and then teach—that would take the rest of his life, perhaps—but that in the relationship between the educator and the person to be educated, there is a relationship of mutual investigation. Can this be done with the young child, or with the young student? In what manner would you set about it? That is the question.

How would you as a parent go into this, how would you help your child to understand the whole nature and structure of his mind, of his desires, of his fears—the whole momentum of life? It is a great problem.

Are we prepared, as parents and teachers, to bring about a new generation of people, for that is what is implied—a totally different generation of people with totally different minds and hearts? Are we prepared for that? If you are a parent, would you give up for the sake of your child drink, cigarettes, pot, you know, the whole drug culture and see that both you and the child are good human beings?

The word 'good' means well-fitting—psychologically, without any friction, like a good door—you understand? like a good motor. Also, 'good' means whole, not broken up, not fragmented. So, are we prepared to bring about, through education, a good human being, a human being who is not afraid—afraid of his neighbour, afraid of the future, afraid of so many things, disease, and poverty? Also, are we prepared to help the child and ourselves to have integrity? The word—'integrity' also means to be whole and to say what you mean and not say one thing and do something else, integrity implies honesty. Can we be honest if we have illusions and romantic and speculative ideals and strong beliefs? We may be honest to a belief but that does not imply integrity. As it is, we bring children into the world, spoil them till they are two or three, and then prepare them for war. History has not taught human beings: how many mothers must have cried, their sons having been killed in wars, yet we are incapable of stopping this monstrous killing of each other.

If we are to teach the young we must have in ourselves a sense of the demand for the good. Good is not an ideal; it is to be whole, to have integrity, to have no fear, not to be confused; these are not ideals, they are facts. Can we be factual and so bring about a good human being through education? Do we really want a different culture, a different human being, with a mind that is not confused, that has no fear, that has this quality of integrity?

6 教育

問い：若者の教育における歴史の意義は何ですか。

歴史をよんでみれば、次のことはまったくはっきりしている。人間は自然とたたかい、征服し、壊し、汚してきたということ、人間は人間とたたかってきたということ。つねに戦争があった。人間は自由になるためにたたかい、だが、人間は制度や組織の奴隷になり、それを何度も突破しようとするたびに、制度や組織の別のシリーズをこしらえるばかりである。自由になるための果てしないたたかいがある。人類の歴史は部族戦争、封建制、植民地のための戦争、王たちの、国家間の戦争の歴史である。そして、それらはみな、いまなおつづいている。部族精神は国民精神となり、洗練されたものの、なおそれは部族精神である。人間の歴史には文化が含まれている。それは、あらゆる種類の苦難やさまざまな病気、いくつもの戦争や宗教的信念、教条、また、神の名において、平和の名にかけて、理想の名のもとに行われた迫害、審問、拷問をくぐりぬけてきた人間の物語である。

では、そういったことすべては若者にどのように教えられるべきか。もしそれが人類の物語、人間の物語であるならば、教育者と若者はともに人間である。それは自分たちの物語である。単に王たちと戦争の物語でなく、それは自分たち自身の物語なのである。教育者は生徒が自分

自身の物語を理解するのをどのようにたすけることができるか。それは過去の物語であり、その生徒はその結果なのであるが。それが問題である。もしあなたが教育者で私が生徒であるなら、私自身、すなわち人類そのものである私、何百万年もの結果である私の脳、その私自身の本質やしくみ全体を私が理解するのをあなたはどのようにたすけますか。暴力、競争、攻撃性、残忍性、残酷さ、恐怖、よろこび、時々快樂、かすかな愛の香り、それらすべては私の内にある。これらすべてを私が理解するのをあなたはどのようにたすけますか。それは、教育者が教育者自分自身をも理解しなければならず、また、生徒である私が私自身を理解するのをたすけなければならないということである。そう、教育は教師と私自身とのコミュニケーションである。そのようにコミュニケーションの過程で、教師は教師自身を理解しつつ、私が私自身を理解するのをたすけるのである。それは、おそらく残りの生涯ずっと教えるのだろうが、教師あるいは教育者はまずはじめに自分自身を理解して、そのあと教えるというのではなく、教育者と教育される人との間に、お互いに探求し合う一つの関係があるのである。子供たちや若い生徒たちとそうしたことができますか。あなたはどんなやり方でそれをはじめようとするのか。それが問題である。

親として、あなたはこれをどのようにすすめますか。あなたの子供が自分の心、自分の欲望、自分の恐怖の本質としくみ全体を、すなわち生の全体的な契機を理解するのをどのようにたすけるのか。大きな問題である。

親や教師として、人は新しい世代の人々を生み出すための準備をしていますか。それはまったくちがう精神や心をもったまったくちがう人々の世代のことを指しているのだが。もしあなたが親なら、あなたの子供のためにお酒を飲んだり、タバコを吸ったり、マリファナを吸ったり、すべての麻薬を断つことができますか。そして、自分の目で、あなたと子供はどちらもよい人間（=good human beings）であると確認することができますか。

‘good’ということばは、申し分なく合っている（=well-fitting）という意味である。心理的に、何の不和もなく、よいドアのように。よいモーターのように。わかりますか。‘good’は全体性（=whole）、壊れていない（=not broken up）、ばらばらでない（=not fragmented）という意味でもある。では、人は、教育を通して、よい人間（=a good human being）、恐れていない人間を生み出す準備をしていますか。その恐れとは隣人への恐れ、未来への恐れ、病気や貧困などたくさんのことへの恐れであるが。また人は、子供や自分たち自身が統合性（=integrity）をもつことをたすける準備をしていますか。‘integrity’ということばは、全体であること、また、気持ちとことばにズレがないこと、言ったこととすることにズレがないことを意味する。インテグリティは正直さ（=honesty）を含んでいる。もし人が、幻想やロマンティックで思弁的な理想や強烈な信仰をもっているなら、人は正直でありえますか。信仰に対しては正直であるかもしれないが、それはインテグリティではない。実際のところ、人は子供たちをこの世界に生み出し、二、三歳になるまで甘やかす、そしてそのあと戦争にそなえさせる。歴史は人類

を教育しなかった。どれほど多くの母親たちが、息子たちが戦争で殺されたと泣き叫ばなければならなかったか。しかも、人はこの途方もない殺し合いを止めることができないのである。

もし人が若者に教えるとしたら、人は自分自身の中によいということに対する欲求をもっていなければならない。よいは理想ではない。それは全体である (=be whole) こと、インテグリティもつこと、恐れを抱えていないこと、混乱していないことである。これらは理想ではない。事実 (=facts) である。私たちは事実のままでいることはできますか (=Can we be factual?)。そして、教育によって、一人一人のよい人間を生み出すことができますか。混乱していない、恐れを抱えていない、インテグリティという質をそなえたちがう文化、異なった人間を、私たち人はほんとうに欲しているのですか。

7 KNOWLEDGE

Question: Why is knowledge, as you have said, always incomplete? When one is observing, is one aware that one is observing, or only aware of the thing that is being observed? Does awareness lead to analysis? What is psychological knowledge?

Whom do you expect to answer these questions, the Delphic oracle, the highly elevated priest, the astologers, the soothsayers, the readers of tealeaves? Whom do you expect to answer these questions? But since you have put these questions, we can talk them over together. Not that I, the speaker, will answer them and then you accept or deny and go away dissatisfied, saying, "I've wasted my morning". If we could seriously talk over these questions, so that we both penetrate into the problem, then it will be your own answer, not the answer of someone you have heard answer these questions. You can talk about cancer, and not have it; but if you have it, you are involved in it, in its pain, anxiety and fear.

Why is knowledge always incomplete? What is knowledge and what do we mean when we say "I know". You may say, "I know my wife or my husband or my girl or boy friend". Do you really know them? Can you ever know them? Do you not have an image about them? Is the image the fact? So, to know is very limited. Scientific knowledge is also limited; scientists are trying to find out what is beyond matter; although they have accumulated a great deal of knowledge they have not been able to find out so far. Knowledge and ignorance always go together; the unknown and the known. Scientists say: through matter we will find that which may be beyond. But we human beings are matter. Our minds are matter. Why do we not go into this, for if the mind can go through itself, the possibility of coming upon that which is the origin of all things, is much more likely?

Knowledge of oneself is also limited. If I seek to know myself I can study psychology, I

can discuss with the psychologists, psychoanalysts, psychotherapists, psychobiologists. But that knowledge is always limited. But if I penetrate into this entity called myself, then there is a possibility of going infinitely beyond. This is a very important thing without which life has very little meaning other than the cycle of pleasure and pain, reward and punishment—the pattern in which we live. That psychological knowledge which we have acquired has created the patterns in which we are caught. Knowledge, whether it is physiological or psychological, must always be limited.

When one is observing, is one aware that one is observing; or only aware of the thing being observed? Does the awareness lead to analysis? What do we mean by observing? There is visual external observation—the observation of the tree—and also inward observation. There is the external hearing with the ear and also hearing inwardly.

When we observe, do we really observe or do we observe with the word? That is: I observe the thing we call a tree and I say 'tree'. I observe with the word. Now, can we find out if it is possible to observe without the word?—for the word has become more important than the seeing. The husband observes his wife, or a wife her husband, with all the memory, pictures, sensations and irritations. They never directly observe.

Can we observe a person with whom we live intimately without the image, without the picture, without the idea? Perhaps we are able to perceive the thing which we call the tree, without the word. That is fairly easy, if you have gone into it. But to observe the person with whom you live without the activation of the memory about that person is not so easy.

This observation, through the image, through the accumulated memory, is no relationship at all. It is a relationship of one picture with another picture and that is what we call relationship. But if you examine it closely you will see that it is not relationship; it is the idea of one against the idea of another.

So can we observe without making an abstraction or idea of what we observe? This is what is meant by psychological knowledge; I build up, psychologically, a great deal of knowledge about my wife, correctly or incorrectly, depending on my sensitivity, depending on my ambition, greed, envy, depending on my self-centred activity. That knowledge is preventing the actual observation of the living person. And I never want to meet that living thing because I am afraid. It is much safer to have an image about that person than to see the living thing. My psychological knowledge prevents pure observation. Now, can one be free or that? Can the machinery that builds these images come to an end? I have these images about my wife, they are there: that is a tremendous fact, like a stone around my neck. How am I to throw it away? Is the stone, the image around my neck, different from

the observer? Is that image, that weight around my neck, different from the observer who says, “I have these images”.

Is the observer who says, “I have these images and, how am I to get rid of them?” different from the images he observes? Obviously not.

So the observer is the image-maker who is making these images and then separating himself from them, saying, “What am I to do about them?” That is the way we live, that is the pattern of our actions, that is our conditioning to which we are accustomed, so we naturally accept it. But we are saying something entirely different, which is that the observer is the observed.

We have to enquire into what the observer is. The observer is the result of all his experiences; he is his knowledge, his memories, his fears, his anxieties—the past. The observer is always living in the past; although modifying himself all the time to meet the present, he is still rooted in the past. There is this movement of time, the past modifying itself in the present and going on to the future. This is the psychological momentum or movement of time.

When we observe, we are observing through the image which we have created about that thing or that person. Can we observe the thing or person without that image? That means: can the observer be absent in observation? When we look at a person whom we know very intimately there arises the image; the more intimately we know them the more definite the image. Can we look at that person without the image? Which means: can we look at that person without the observer? That is pure observation.

Does this awareness lead to analysis? Obviously not. What do we mean by analysis and who is analysing? Suppose I am analysing myself; who is the analyser? Is the analyser different from me? Obviously not.

We are eliminating the very structure of conflict between human beings; the conflict that exists as long as there is division. It is the division in myself which creates the division outside. There is a division in myself if I say I am a Hindu. The identification with the image of being a Hindu gives me security. So I hold on to it, which is nonsense, for there is no security in an image. And the Muslim and the Arab and the Jew, do the same. So we are at each other's throats.

When the observer, psychologically, is the observed, there is no conflict, because there is no division. See this clearly: our minds have been trained and educated to have this division; that 'I' and the thing observed are different—my anger and my jealousy are different from me; therefore I must do something about them, control them, suppress them, go beyond

them, act upon them. But when anger and jealousy are ‘me’, what has happened? There is the elimination of conflict. The pattern has been broken. The pattern, which is the conditioning of my mind, has been broken. It is the ending of something and the beginning of something else. If the pattern is broken and the struggle is ended what then takes place? A new momentum, a new movement, takes place.

You can observe a tree and the word ‘tree’ interferes; the moment you see it you say, “There’s a tree”, or a butterfly, a deer, or the mountain or river: there is immediate reaction. That reaction can be observed and perhaps put aside so that there is just observation of the tree, the beauty of the line of it, the grace of it, the quality of it. Now, do the same with a person with whom you have lived, with whom you have been intimate—observe without a single image about that person. Then relationship is something extraordinary.

Suppose a wife has no image about her husband; what then is the relationship for the husband? The husband is violent and the wife is not violent. Is there any relationship—except perhaps through the senses, sexually—is there any relationship? Obviously not, but they are living in the same house. So what will the husband do? First of all that is a most extraordinary way of living, in which there may perhaps be real, profound love. The wife has no images about her husband, but he has images, ideas all the time, piling up. They are living in the same house. What takes place? She is free, he is not. He wants her to have an image about him, for he is used to that. So the most destructive relationship goes on till she says, “Enough”. Does she divorce him, leave him? Perhaps, since she has no images about him, a totally different atmosphere has been brought about in the house. He is beginning to be aware because she is immovable—you understand?—and he is moving all around. When he meets something that is immovable, something happens to him.

7 知識

問い：あなた（クリシュナムルティ）がいわれたように、なぜ知識（=knowledge）はつねに不完全（=imcomplete）なのですか。人は、よく見ているとき、よく見ているということだけに気づいているのですか。それとも、よく見られている当のものにだけ気づいているのですか。気づきは分析に至らないのですか。心理学的な知識とは何ですか。

あなた（質問者）はこれらの問いにだれにこたえてもらいたいのですか。デルフォイの神託、高位の聖職者、占星術師、占い師、茶の葉から占いをする者、だれにこたえてほしいのですか。しかし、あなたがこれらの質問をしたのだから、私たちはいっしょに話し合うことはできる。

私がそれにこたえて、それからあなたは受け入れるなり、否定するなりして、「朝の時間を無駄にってしまった」と不満げに去るというのではなく。二人とも問題の中に入りこめるように、これらの問いについて真剣に話し合えるならば、それがあなた独自のこたえに、これらの問いに対してあなたが聞いてきただれかのこたえでないこたえになるだろう。あなたはガンについて話すことができる。だが、ガンではない。しかし、あなたがガンであるならば、あなたはガンに、ガンのもつ苦痛、心配、不安にとりつかれるだろう。

なぜ知識はつねに不完全なのか。知識とは何か。また、人が「私は知っている(=‘I know’)」というときに人が意味していることは何だろうか。「私は私の妻、私の夫、私のガールフレンド、私のボーイフレンドを知っています」と人はいうだろう。だが、それらをほんとうに知っているのだろうか。一体、それらを人は知ることができるだろうか。人はそれらについてのイメージをもってはいないか。そのイメージは事実だろうか。そう、知るということはとても限られているのである(=to know is very limited)。科学的な知識もまた、限られている。科学者は物質を越えたものをさがし出そうと努力している。彼らは莫大な量の知識を積み重ねてきたが、これまでのところ、見つけ出すことはできていない。知識と無知(=ignorance)、すなわち未知のものと同知のもの(=the unknown and the known)はつねにいっしょにいる。科学者はいう。物質を通して、物質を越えるものを私たちは見つけるのだ、と。しかし、私たち人間は物質である。人の心は物質である。なぜ人はこのことを取り扱おうとしないのか。もし心が、心じたいをよく調べることができるなら、万物の起源が見えてくる可能性はもっと高くなるのではないか。

自分自身についての知識もまた、限られている。もし人が自分自身について知ろうとするならば、心理学を学ぼうし、心理学者、精神分析医、心理療法家、精神生物学者と議論するだろう。けれども、そういった知識はつねに限られている。だが、もし私が、私自身と呼んでいる実体(=this entity called myself)の内部まで洞察するならば、そこには限りない超越への可能性がある。これはとても重要なことである。もしそれがなければ、人生はよろこびと悲しみ、賞と罰のサイクル——それが私たちが送っている生活のパターンであるが、それ以外に何の意味ももたなくなるだろう。私たちが獲得した心理学的な知識が、そこに私たちがとらわれているパターンをつくりだしているのである。知識は、生理学的なものであろうと、心理学的なものであろうと、つねに限られているのである。

観察しているとき、人は自分が観察しているということを意識しているだろうか。それとも、観察されているそのものを意識しているのだろうか。気づきは分析へと導くのか。観察することは何を意味するのか。木を観察するように視覚による外界の観察があり、また、内面の観察がある。耳を使っての外界の聴き取りがあり、また、内面の聴き取りがある。

観察するとき、人はほんとうに観察しているのだろうか。それとも、ことばで観察しているのだろうか。人は、人々が木と呼んでいるものを観察し、「木」と言う。人はことばでもって観

察する。では、ことばなしに観察することができるかどうか、わかりますか。ことばは見ることよりもずっと重要になった。夫は妻を観察する。また、妻は夫を観察する。記憶、映像、感覚、いらだちのすべてでもって。彼らは決して直接に (=directly) 観察しない。

人はともに暮らす身近な人をイメージも像 (=the picture) も考え (=the idea) ももたずに、観察することができるだろうか。おそらく人は人々が木と呼んでいるものをことばなしに知覚することができる。やってみればそれはとてもたやすいことである。だが、ともに暮らす人を、その人についての記憶をとめたまま、観察することはそれほどたやすいことではない。

イメージや蓄積された記憶によって行われるこの観察は、関係というものではまったくない。それは一つの映像と別の映像との間の関係であるが、これを人々は関係と呼んでいるだけである。しかし、よく調べてみれば、それは関係ではないと気づくだろう。それはある人が他者の観念に対してもつ観念なのである。

人は自分が観察するものについて、抽象化したり、観念化したりせずに、観察することができるか。これがまさに心理学者のいう知識の意味するものである。私は自分の妻について心理学的な膨大な量の知識を築きあげる。正しかろうとまちがってしようと、私の感覚に基づいて、私の野心、欲、ねたみに基づいて、私の自己中心的な行動によって。その知識は生きているその人 (=the living person) に対するほんとうの観察 (=actual observation) を妨げる。また、人は生の生きているものと出会いたがらない。なぜなら、それを恐れているからである。ある人についてのイメージをもつことは、生きているその人を見るよりもずっと安全なのである。心理学的な知識は、純粋に観察する (=pure observation) ことを妨げる。では、人はそれから自由になりうるか。そういったイメージをつくるしくみを終わらせることはできるのか。ある人は妻についてこうしたイメージをもっている。イメージはそこにある。私の首のまわりの石と同様に、それはとてつもない事実である。私はそれをどのようにして投げ捨てるだろうか。その石、私の首のまわりのイメージは、観察する者 (=observer) とは異なるのか。私の首をとりまくその重し、そのイメージは「私はイメージをもっています」という観察者とは異なるのか。

「私はイメージをもっています。どのようにすれば、私はそれを捨てられるでしょう」という観察者は、その観察者が観察するイメージとは異なるのか。いうまでもなく、ちがう。

そう、観察者は、イメージをつくる者 (=the image-maker) である。そういったイメージをつくり、そうしてそれらから自分を切り離し、「私はそれらに対して何をすべきですか」という。それが私たちの生き方であり、行動のパターンであり、私たちが慣らされた条件づけであり、人はそれをふつうのこととして受け入れている。だが、私たちはまったくちがうことをいう。観察者は観察される者である、と。

人は、観察者とは何であるかを調べなければならない。観察者は彼の経験すべての所産である。彼はその知識であり、記憶であり、恐れであり、不安であり、過去である。観察者はつね

に過去を生きている。いまと出会うためにつねに自分自身を手直すけれども、それでも彼はなお過去に根ざしている。過去が現在においてそれ自身を修飾しながら未来に向かう時間の運動がある。それが心理学的な時間であり、時間の運動なのである。

観察するとき、人は、そのものやその人について自分がつくりだしてきたイメージを通して観察している。そのイメージなしに、ものごとや人を観察することができるか。つまり、それは観察において観察者がいなくなることは可能か、ということである。身近な、よく知っている人を観察するとき、イメージが現れる。親しければ親しいほど、イメージは強い。人は、イメージをもたずにある人を見ることが出来るか。観察者なしに、その人を見ることが出来るか。すなわち、それが純粋な観察である。

この気づきは分析へ至るのか。明らかに至らない。分析とは何を意味するのか。また、分析しているのはだれなのか。自分が自分自身を分析していると仮定してごらんなさい。だれが分析者ですか。分析者は私とは異なるのか。明らかに同一である。

人は、人の間で起こる衝突のしくみについて考えない。分断があるかぎり、衝突は存在する。外界での分断を生み出すのは自分自身の中での分断である。自分はヒンドゥー教徒であるといえば、自分自身の中に分断が生じる。ヒンドゥー教徒であるというイメージへの同一化が自分に安全をもたらす。そしてそれを離そうとしない。といっても、イメージの中に安全はないのだから、それは無意味なことなのだが。イスラム教徒、アラブ人、ユダヤ人も同じことをしている。人々はお互いの喉元に手をかけようとしているのである。

心理学的に、観察者が観察される者であるとき、衝突、葛藤はない。分断がないからである。ここをよく見なさい。「私(=I)」と観察される者は異なる。私たちの心はこのような分断をもつように慣らされ、教育されてきている。私の怒りや私の嫉妬は私とは別である、というように。それゆえ、私は制御したり、抑えたり、乗り越えたり、力を及ぼしたり、それらに対してなにかしなければならぬのである。しかし、怒りや嫉妬が「私(=me)」であるとき、何が起こるだろうか。葛藤が消えるのである。そのパターンはこわれてしまう。そのパターン、すなわち人の心の条件づけであるが、それは消えてしまっている。あることの終わりであり、また、あることのはじまりである。そのパターンがなくなり、もがきがやむならば、そのときなにが起こるか。ある新しい動き、新しい運動が起こるのである。

人は木を観察することができる。そして、「木」ということばが邪魔をする。人はそれを見たときに「木がある」と言う。それはチョウであるかもしれないし、シカか山か川かもしれないが、即座の反応がある。その反応は観察されることが可能であり、おそらく、よこにおくことができる。そのとき、木の観察、その輪郭の美しさ、気品、質感といった木の観察だけがある。では、同じことを自分がいっしょに暮らしている人に、身近な人にしてごらんなさい。その人についてイメージをまったくもたずに観察してごらんなさい。そのとき、関係は日常を超えたすごいなにかである。

妻が自分の夫に何のイメージももっていないと想像してごらん下さい。そのとき、夫にとって関係とは何か。夫は暴力的で、妻は暴力的でない。どんな関係があるだろうか。感覚を通した性的なもの以外に、どんな関係があるだろうか。明らかにない。だが、彼らは同じ家で暮らしている。では、夫は何をするだろうか。なによりもまずそれはとてつもない生き方である。おそらくそこに、ほんとうの深い愛がある。妻は夫についてイメージももっていないが、夫はイメージや考えをもっており、つねに積みあげている。彼らは同じ屋根の下で暮らしている。何が起こるか。妻は自由であるが、夫は自由でない。夫は妻に夫についてのイメージをもつように要求する。というのも、夫はそれに慣れているからである。そう、妻が「もうたくさん」というまで、ひどく破壊的な関係がつづく。妻は夫と離婚するか。夫を見捨てるか。おそらく、妻は夫に何のイメージももっていなければ、まったく異なる雰囲気家庭にもたらされるだろう。夫は気づきはじめる。なぜなら、妻が冷静でゆるぎないからである。こここのところ、わかりますか。そして、夫は動揺する。不動のなにかに出会ったとき、夫になにかが起きるのである。

8 PAIN

Question: Does not thought originate as a defence against pain? The infant begins to think in order to separate itself from physical pain. Is thought—which is psychological knowledge—the result of pain, or is pain the result of thought? How does one go beyond the defences developed in childhood?

Put a pin into a leg and there is pain; then there is anxiety that the pain should end. That is the momentum of thinking, the nervous reaction; then comes identification with that reaction and one says: “I hope it will end and I must not have it in the future”. All that is part of the momentum of thinking. Fear is part of pain ; is there fear without thought?

Have you ever experimented with dissociating thought from pain? Sit in a dentist’s chair for some time and watch the things going on; your mind observing without identifying. You can do this. I sat in the dentists chair for four hours; never a single thought came into my mind.

How does one go beyond the defences cultivated in childhood? Would one go to a phychoanalyst? One may think that is the easiest way and one may think that he will cure all the problems arising from one’s childhood. He cannot. He may slightly modify them. So what will one do? There is nobody one can go to. Will one face that? There is nobody. Has one ever faced that fact that there is nobody one can go to? If one has cancer one can go to doctor, that is different from the psychological knowledge that one has developed during

childhood which causes one to become neurotic; and most people are neurotic.

So, what is one to do? How is one to know, in a world that is somewhat neurotic, in which all one's friends and relations are slightly unbalanced, that one is also unbalanced? One cannot go to anybody; so what is taking place in one's mind now that one no longer depends on others, on books, on psychologists, on authority? What has happened to one's mind if one actually realises that one cannot possibly go to anybody? Neuroticism is the result of dependence. One depends on one's wife, on the doctor; one depends on God or on the psychologists. One has established a series of dependences around one, hoping that in those dependences one will be secure. And when one discovers that one cannot depend on anybody, what happens? One is bringing about a tremendous psychological revolution: one is usually unwilling to face it. One depends on one's wife; she encourages one to be dependent on her; and *vice versa*. That is part of one's neurosis. One does not throw it out, one examines it. Can one be free of it, not depending on one's wife—psychologically, of course? One will not do it because one is frightened; one wants something from her, sex or this or that. Or she encourages one with one's ideas, helps one to dominate, to be ambitious, or says one is a marvellous philosopher.

But see that the very state of dependence on another may be the cause of the deep psychological neurosis. When one breaks that pattern, what happens? One is sane! One must have such sanity to find out what truth is. Dependence has been from childhood, it has been a factor against pain and hurt, a factor for comfort, for emotional sustenance and encouragement—all that has been built into one, one is part of that. This conditioned mind can never find out what truth is. Not to depend on anything means one is alone; all one, whole—that is sanity, that sanity breeds rationality, clarity, integrity.

8 苦痛

問い：思考 (=thought) は苦痛 (=pain) への防衛として生じるのですか。幼児は身体的な苦痛と苦しみを区別するために思考をはじめ。思考、心理学的な知識は苦痛の結果なのですか。それとも、苦痛が思考の結果なのですか。人は幼いころに身につけた防衛をどのように超えるのですか。

ピンを足に刺せば痛みが起きる。そのとき、痛みがやむようにという切望が生じる。それが思考の契機であり、神経系の反応である。そしてそのとき、その反応への同一化が起こり、人はいう。「私は苦痛がやんで、二度と痛みにさらされないことを望む」と。このことこそが、思考というものの運動である。恐れは苦痛の一部である。思考なしに恐れは存在しますか。

苦痛から思考を切り離すということを試してみたことがありますか。しばらくの間、歯医者
のイスに座って何が起こるか見ていなさい。同一化することなく、観察する精神。人はこれが
できる。私は四時間、歯医者 of イスに座っていたが、私の心にたった一つの考えも入りこんで
こなかった。

人は幼いころに身につけた防衛をどのように越えるのか。精神分析医のところに行きますか。
それが最もたやすい方法だともうかもしれない。精神分析医は小児期に由来するすべての問題
を解決してくれると思うかもしれない。だが、彼はできない。彼はそれらの問題をすこしは和
らげるかもしれない。それでは、人はどうしますか。頼れる人はだれもいない。人はそのこと
を直視し(=face)ますか。だれもしない。頼るべき人はまったくだれもいないという事実
に、人が向かい合ったことがありますか。もしガンなら、その人は医者に行くだろう。それは子供
のころに心の中で作りあげられた知識とはちがったものである。これが人を神経症にし、そ
して多くの人々は神経症である。

では、人はどうすべきか。人はどのように知るべきか。いささか神経症的な世界において、
友人や関係が不安定気味で、その当人もバランスを欠いている中で。人はだれのところへも行
けない。では、だれにも、書物にも、心理学者にも、権威にも、もはや頼らないという心の状
態において、何が起こるだろうか。結局、人はだれのところへも行けないということをはんと
うに理解したなら、人の心に何が起こるのだろうか。神経症的な傾向は依存の結果である。人
は自分の妻に頼る。医者に頼る。人は神に頼り、心理学者に頼る。人は自分のまわりに一連の
頼みの綱をこしらえ、その頼みの綱が自分をまもってくれるであろうと考える。そして、人が
だれにも頼ることができないということに気づいたとき、何が起きるか。一つのとてつもない
心理学的な革命が起こっている。人はたいてい、それに直面しながらない。人は自分の妻に頼
る。妻は自分に頼るように夫を励ます。逆の場合も同様である。それは神経症の一部である。
人はそれを捨ててしまわずに診察する。人はそれから自由になることはできますか。妻に頼ら
ずに、もちろん心理的な意味だが。人はそうはしないだろう。恐れているからである。人は自
分の妻からセックスやあれやこれや、なにかを欲しがっている。あるいは、妻は夫の観念を使
って夫を励ます。夫が人を支配的するように、野心に燃えるように。また、あなたはすばらし
い哲学者だといったりもする。

しかし、深刻な神経症の原因となりうるほどの、他の人への依存というこの現状を見てごら
んなさい。そのパターンをこわしたとき、何が起きるか。正気になる。人は真理とは何である
かを見つけ出すためにはこのような正気をもたなければならない。依存は小児期から存在して
おり、それは苦痛や痛みに対抗する要因であり、また、安らぎや情緒的な支えや励ましを求め
る要因である。それらはすべて人の中に組みこまれており、人はその一部なのである。このよ
うに条件づけられた心は、何が真理であるのかを見つけ出すことは決してできない。何にも頼
らないということは、人が一人であるということ(=alone)を意味する。まったくの一人、全

体——それが正気である。そのような正気が合理的な思考(=rationality), 明晰さ(=clarity), 統合(=integrity)を育むのである。

9 TRUTH

Question: There is prevalent assumption these days that everything is relative, a matter of personal opinion, that there is no such thing as truth or fact independent of personal perception. What is an intelligent response to this belief?

Is it that we are all so personal that what I see, what you see, is the only truth? That my opinion and your opinion are the only facts we have? That is what the question implies; that everything is relative; goodness is relative, evil is relative, love is relative. If everything is relative (that is, not the whole, complete, truth) then our actions, our affections, our personal relationships are relative, they can be ended whenever we like, whenever they do not please us.

Is there such a thing as truth apart from personal belief, apart from personal opinion? Is there such a thing as truth? This question was asked in the ancient days by the Greeks, by the Hindus and by the Buddhists. It is one of the strange facts in the Eastern religions that doubt was encouraged—to doubt, to question—and in religion in the West it is rather put down, it is called heresy.

One must find out for oneself, apart from personal opinions, perception, experiences, which are always relative, whether there is a perception, a seeing, which is absolute truth, not relative. How is one going to find out? If one says that personal opinions and perceptions are relative then there is no such things as absolute truth, all is relative. Accordingly our behaviour, our conduct, our way of life, is relative, casual, not complete, not whole, fragmentary.

How would one find out if there is such a thing as truth which is absolute, which is complete, which is never changing in the climate of personal opinions? How does one's mind, the intellect, thought, find out? One is enquiring into something that demands a great deal of investigation, an action in daily life, a putting aside of that which is false—that is the only way to proceed.

If one has an illusion, a fantasy, an image, a romantic concept, of truth or love, then that is the very barrier that prevents one moving further. Can one honestly investigate what is an illusion? How does illusion come into being? What is the root of it? Does it not mean playing with something which is not actual?

The actual is that which is happening, whether it is what may be called good, bad or indifferent; it is that which is actually taking place. When one is incapable of facing that which is actually taking place in oneself, one creates illusions to escape from it. If one is unwilling or afraid to face what is actually going on, that very avoidance creates illusion, a fantasy, a romantic movement, away from that which is. That word 'illusion' implies the moving away from that which is.

Can one avoid this movement, this escape, from actuality? What is the actual? The actual is that which is happening, including the responses, the ideas, the beliefs and opinions one has. To face them is not to create illusion.

Illusions can take place only when there is a movement away from the fact, from that which is happening, that which actually is. In understanding that which is, it is not one's personal opinion that judges but the actual observation. One cannot observe what is actually going on if one's belief or conditioning qualifies the observation; then it is the avoidance of the understanding of that which is.

If one could look at what is actually taking place, then there would be complete avoidance of any form of illusion. Can one do this? Can one actually observe one's dependency; either dependency in a person, on a belief, on an ideal, or on some experience which has given one a great deal of excitement? That dependence inevitably creates illusion.

So a mind that is no longer creating illusion, that has no hypotheses, that has no hallucinations, that does not want to grasp an experience of that which is called truth, has now brought order into itself. It has order. There is no confusion brought about by illusions, by delusions, hallucinations; the mind has lost its capacity to create illusions. Then what is truth? The astrophysicists, the scientists are using thought to investigate the material world around them, they are going beyond physics, beyond, but always moving outward. But if one starts inwards one sees that the 'me' is also matter. And thought is matter. If one can go inward, moving from fact to fact, then one begins to discover that which is beyond matter. Then there is such a thing as absolute truth, if one goes through with it.

9 真理

問い：今日、あらゆるものが相対的で、個人的意見の問題である、すなわち個人のとらえ方から離れた真理 (=truth) あるいは事実 (=fact) というようなものはないという広くいきわたった考え方があります。こうした信条に対する知性ある対し方とはどんなでしょうか。

人々はみな、それぞれであるから、私が見るもの、あなたが見るものが唯一の真理なのか。私の意見、あなたの意見が、私たちのもつ事実のすべてなのか。それが質問の意味することである。すなわち、あらゆるものは相対的である。善は相対的であり、悪は相対的であり、愛は相対的である。もし、あらゆるものが相対的である(全的でなく、完全でなく、真理でもない)ならば、人の行為、人の感情、人の個人的な関係は相対的であり、人が望むとき、人を満足させないときにはいつでも、それらは終わりにされるだろう。

個人的な信念から離れた、個人的な意見から離れた真理というようなものがあるだろうか。真理というようなものがあるのか。この問題は、その昔、ギリシャ人、ヒンドゥー教徒、仏教徒によって問われた。疑うことが奨励されるということが東洋の宗教における奇妙な事実の一つである。疑うこと、問うこと。それは、西洋の宗教においてはむしろはねつけられ、異端と呼ばれる。

人は、個人的な意見、知覚、経験を越えて、自分自身で見つけ出さなければならない。それらはいつも相対的である。他方で、相対的でなく、絶対的な真理であるところの一つの知覚や見ることが存在する。人はそれをどのようにして見つけ出すのか。もし個人的な知覚や経験は相対的であるというのなら、絶対的な真理というようなものはない。すべてが相対的である。したがって、人のふるまい、人の行動、人の生き方は相対的で、気まぐれで、完全でなく、全体でなく、断片的である。

もし、絶対的で、完全で、個々人の意見の風向きによっても変わらない真理というようなものがあるならば、人はどのようにして見つけ出すのか。人間の精神、知性、思考はどのように見つけ出すのか。人がなにかを探求するとき、人にはかなりの調査が必要となり、日常生活の中でなにかを行い、いずれが誤りかということの横におく必要が出てくる。それが先へ進むための唯一の方法である。

もし人が、真理や愛についての幻想や空想、イメージ、ロマンティックな考えをもっているならば、それは人がさらに遠くへ進もうとするのを妨げるまさにバリアである。幻想とは何か、ごまかさず、人は調べることができますか。幻想はどのようにして存在するようになるのか。その根元は何か。それは現実的でないなにかで戯れていることを意味しないのか。

現実的なもの(=the actual)とは起こっているところのものである。いわゆる善や悪、あるいはどっちでもいいと呼ばれているものであろうと、実際に起こっているものである。自分自身の中で実際に起きていることに直面するのが耐えられないとき、人はそれから逃れるために幻想をつくりだす。もし人が、実際に起きていることに直面することを嫌がったり、恐れるならば、その回避したいが、それであるところのものから離れて幻想や空想、ロマンティックな動きをつくりだす。「幻想(=‘illusion’)」ということばは、「それであること(=that which is)」から立ち退くことを意味する。

人は現実(=actuality)からのこの移動、この逃走を避けられるか。現実的なものとは何か。

現実的なものとは起きていることであり、反応や観念、人がもっている信念や意見も含んでいる。それらに直面することは幻想をつくりだすことではない。

幻想は事実から、起こっていることから、現に存在しているものから退く動きがあるときにだけ生じる。そこにあるものを理解するとき、判断を下すのは、その人個人の意見ではなく、実際の観察（=actual observation）である。もし人の信念や条件づけがその観察に加わっているならば、人は実際に起こっているものを観察することはできない。つまり、そこにあるものの理解の回避である。

もし人が実際に起こっているものを観察することができるならば、そのとき、あらゆる種類の幻想を完全に避けることができるだろう。人はこれをできますか。人は自分が依存しているということを実際に見ることができるか。それが人に対する依存であれ、信仰や観念への依存であれ、あるいはとても興奮させた経験への依存であれ、依存は必ずや幻想をつくりだす。

そう、もはや幻想をつくりださず、憶測をもたず、幻覚をもたず、真理と呼ばれているような経験に飛びつこうとしない心は、それじたいの中に秩序をもたらす。そこには秩序がある。幻想や妄想、幻覚によってもたらされる混乱はない。精神は幻想をつくりだすための能力を失う。では、真理とは何か。宇宙物理学者、科学者たちは彼らを取り囲む物質的な世界を研究するために思考を使っている。彼らは物理学を越えようとしており、越えつつあるが、その越え方はいつも外に向かっている。しかし、目が内面に向かうならば、人は「私」もまた物質であるということを見る。そして思考が物質である。事実から事実へ移りながら、人が内面に向かって進むことができるならば、そのとき、人は物質を越えたそこにあるものを発見しはじめる。もし人がそれを成しとげるならば、そのとき、そこに一つのもの、絶対的真理といえるものが存在する。

10 VIOLENCE

Question: How can we take responsibility for what is happening in the world while continuing to function in our daily life? What is right action with regard to violence and when faced with violence?

Is that which is happening in the world outside different from that which is happening inside? In the world there is violence, extraordinary turmoil, crisis after crisis. There are wars, division of nationalities, religious differences, racial and communal differences, one set of systematized concepts against another. Is that different from what is going on inside us? We are also violent, we are also full of vanity, terribly dishonest, putting on different masks for different occasions.

So it is one movement like the tide going out and the tide coming in. We human being

have created what is going on outside and that cannot possibly be changed unless we human beings change. That is the root of it. We want to do something in the world, have better institutions, better governments etc, but we never say we have created that. Unless we change, that cannot change. After the millions of years we have lived, we are just the same. We have not changed fundamentally and we continue to create havoc in the world.

The fact is, one is the world; not as an idea but actually. Do you see the difference between the idea and the actuality? One has heard the statement that one is the world and one makes an idea, an abstraction of it. And then one discusses the idea, whether it is true, or false and one has lost it. But the fact is, one is the world; it is so.

So one is responsible for changing it. That means, one is responsible, completely, for the way one lives one's daily life. Not try to modify the chaos that is going on, decorate it or join this group or that group or institution, but as a human being, who is the world, go through a radical transformation oneself; otherwise there can be no good society.

Most of us find it difficult to change, to give up smoking, for example. There are institutions that will help one not to smoke! See how one depends on institutions. So, can one find out why one does not change, why one does not, when one sees something wrong—'wrong' in quotes—end it, immediately? Is it that one hopes that somebody else will bring order in the world and then one can just slip into it? Is it that we are indolent, psychologically lazy ineffectual?

How many years one spends in acquiring certain techniques, going through high school, college, university, becoming a doctor, yet one will not spend a day to bring about a change in oneself.

So one's responsibility is to bring about a radical change in oneself, because one is the rest of humanity.

The next question is: What is right action with regard to violence and when faced with violence? Violence is anger, hatred, conformity, imitation, obedience. The denial of all that is the opposite of that. Is it possible to be free of the violence that is part of one's life, inherited, probably from the anger; it means, not only to be free of anger, but to have no anger in the mind. Or, to be free of conformity—not outward conformity, but conformity through comparison. One is always comparing, psychologically—I was, I will be, or I am, something. A mind which is always comparing, judging, is aggressive. If the mind is free from imitation, conformity and comparison then from that there is right action.

Can the mind be absolutely free of all violence? If it is, then when it meets violence, what is its response? If one meets violence, face to face, what is the action that takes place? Can

one judge what one is going to do when one meets it? The brain when faced with violence, undergoes a rapid chemical change; it reacts much quicker than the blow. One's whole body reacts and there is immediate response; one may not hit back, but the very presence of anger or hatred causes this response and there is action.

In the presence of a person who is angry see what takes place if one is aware of it and does not respond. The moment one is aware of the other person's anger and one does not react oneself, there is quite a different response. One's instinct is to respond to hate by hate, to anger by anger, there is the welling up chemically which creates in the system the nervous reactions; but quieten all this in the presence of anger, and a different action takes place.

10 暴力

問い：私たちの日常生活が変わらずつづいている一方で、世界で起きていることに対して、人はどのように責任を負うのですか。暴力(=violence)に直面したとき、暴力に応じる正しい行動(=right action)とは何ですか。

外側の世界で起きていることは内面で起きていることとはちがうのですか。世界には暴力があり、大きな混乱があり、危機に次ぐ危機がある。戦争があり、いろいろな国民に分かれており、宗教的な差異があり、民族、共同体の差異があり、体系化された考え方のちがいがある。それは人の内部で起こっていることと異なるのか。私たちだって、暴力的で、虚栄心や不正直さでみちていて、臨機応変にさまざまな仮面を付けかえる。

そう、それは満ちては引いていく波のような一つの動きである。私たち人間は外の世界で起きていることをつくりだしてきたのだが、それは私たち人間が変わらないかぎり、とても変えられない。問題の根はそこにある。人は世界の中でなにかしようとする。制度を改善しようとしたり、政府を改善しようとしたり。だが、自分たちがそれをつくりだしてきたのだとは人は決していわない。人が変わらなにかぎり、それは変わらない。人が生かされてから何百万年も経つというのに、人はいまだにまったく変わらない。人が根本から変わったことはない。だから、人は世界で大きな破壊を生み出しつづけているのである。

実のところ、あなたは世界である(=The fact is, one is the world.)。一つの観念(=an idea)としてではなく、実際に(=actually)。観念と事実(=actuality)のちがいに気づいていますか。あなたは世界であると聞いたら、人はその内容に見当をつけたり、要点を抽象化したりする。そのあと、その観念が真か偽かを議論し、そして、その議論で負けてしまうかもしれない。しかし、事実(=fact)はなくなるらない。あなたは世界である。実際、そうなのである。

だから、人は世界を変える責任を負っている。すなわち、日々の生活をどう生きるかについて

て完全に責任を負っているということである。つづいている混乱を修正しようとしたり、飾り立てたり、あるいは何らかのグループや機関に加わったりしようとするのではなく、人間として、世界である一人の人間として、根本的な変化(=radical transformation)を自分が経験することである。そうしなければよい社会(=good society)というのはいないのである。

大半の人は、タバコをやめることのように、変わることの難しさに気づいている。人がタバコを吸わないようたすけてくれるいくつかの制度があるでしょう。どれほど人が制度に頼っているのか、見てごらんください。さあ、なぜ人は変わらないのか、なぜ人はあるものが悪いと気づいたときにそれを即座にやめないのか、見つけ出せたでしょう。人は他のだれかがこの世に秩序をもたらしてくれ、そしてそこへそっと入りこもうと希望するからだろうか。人がものぐさで、心が怠惰で無能だからだろうか。

一定の技術を身につけ、高校や大学へ行き、医者になるまでに、人はどれほどの年月を費やしますか。だが、人は自分自身に変化を引き起こすために、たった一日も費やさないでしょう。

人の責任は自分自身に根本的な変化を引き起こすことにある。なぜなら、あなたが人類なのだから(=one is the rest of humanity)。

さて、もう一つの質問は、暴力に直面したとき暴力に応じる正しい行動は何ですか、である。暴力とは怒り、嫌悪、追従、模倣、服従である。それらすべてへの否定はそれらに対立するものになる。動物から受け継いだであろう生命活動の一部である暴力から自由になることは可能ですか。相対的にではなく、完全に自由に。それは怒りから自由になることでもある。それは怒りから自由になるだけでなく、心の中に怒りをもたないということでもある。あるいは同調から自由になることである。外面的な同調ではなく、比較による同調から自由になることである。人は心理的につねに比較している。以前の私、未来の私、あるいはいまの私やなにかと。つねに比較し、判断している心は攻撃的である。もし心が、模倣や同調、比較から自由であれば、そのときそこに正しい行動がある。

心は、あらゆる暴力から自由になれるだろうか。もしそうならば、暴力にでくわしたとき、それへの反応はどうだろうか。人が暴力に直面したとき、どんな行動が起こるのだろうか。暴力にでくわしたとき、自分が何をするか人は判断できますか。暴力に直面したとき、脳は急速な化学変化を遂げる。こぶしよりもっとはやく反応する。人のからだ全体が反応し、直接的な反応が起こる。殴り返しはしないかもしれないが、怒りや嫌悪の出現が、まさにこの反応を生じさせ、行動が起こるのである。

目の前に怒っている人がいたとして、もしそのことに気づいていて、反応しないとしたら、何が起こるだろうか。他人の怒りに気づいたとき、自分から反応しないならば、相手の出方はまったくちがうようになる。人は本能的に憎悪には憎悪を、怒りには怒りをもって応えようとする。化学物質の噴出があり、それが神経系の反応を生み出す。しかし、怒りを前にして、これらすべてがしづまるならば、ちがう行動が起こる。

5. クリシュナムルティ用語集

今回とりあげた1章から10章の中でキーワードになることばを選び出し、クリシュナムルティのことばを手がかりにそれらのことばについて考えてみた。)印はクリシュナムルティのことばからの引用、 *印はそれに関連する事項や小林のコメントである。

the actual/actuality

*1 「現実的なもの」「現実」「事実」と訳している。

- 1) 「現実的なもの(=the actual)とは起こっているところのものである。いわゆる善や悪、あるいはどっちでもいいと呼ばれているものであろうと、実際に起こっているものである(=it is that which is actually taking place)」(「9 真理」)
- 2) 「現実的なものとは起きていることであり、反応や観念、人がもっている信念や意見も含んでいる。それらに直面することは幻想をつくりだすことではない」(「9 真理」)
- 3) 「観念(=idea)と事実(=actuality)のちがいに気づいていますか。あなたは世界であると聞いたら、人はその内容に見当をつけたり、要点を抽象化したりする。そのあと、その観念が真か偽かを議論し、そして、その議論で負けてしまうかもしれない。しかし、事実(=fact)はなくなるしない」(「10暴力」)

*2 the actual, actuality とは、事実、起こっていること、現にあるもの。

education

- 1) 「もしあなたが教育者で私が生徒であるなら、私自身、すなわち人類そのものである私、何百万年もの結果である私の脳、その私自身の本質やしぐみ全体を理解するのをあなたはどのようにたすけますか。暴力、競争、攻撃性、残忍性、残酷さ、恐怖、よろこび、時々の快樂、かすかな愛の香り、それらすべては私の内にある。これらすべてを私が理解するのをあなたはどのようにたすけますか」(「6 教育」)
- 2) 「親として、あなたはこれをどのようにすすめますか。あなたの子供が自分の心、自分の欲望、自分の恐怖の本質としぐみ全体を、すなわち生の全体的な契機を理解するのをどのようにたすけるのか」(「6 教育」)

*1 人はさまざまな衝動を内にもっている。それは事実。

事実、できごとじたいは善でも悪でもない。それらの価値判断は人が加えること。

- 3) 「もしそれ(歴史)が人類の物語、人間の物語であるならば、そのとき、教育者と若者はともに人間である。それは自分たちの物語である。単に王たちと戦争の物語でなく、それは自分たち自身の物語なのである」(「6 教育」)

*2 私たちは「人」である。自分をごまかすことは「人」を偽ることである。

「人」とは何か、「人であるということ」に気づくこと。

さまざまな衝動、生のあらゆる動き、それら生の全体的な動きを見ること、それに気づくこと、それを認めること。「教育」は、恐れをもたずに、選択なく、全的に見ること、そして気づくことをたすけるべきなのではないか。人がもつ衝動や欲望をないものであるかのように過ごすこと、また、たとえば悪いことであるとされる衝動を拒絶、排除、抑圧し、見て見ぬふりをするをすすめていくことは「教育」ではない。

fact

*1 「事実」と訳している。

1) 「私は執着している」と人がいうとき、それは考え(=idea)なのか、それともそれは事実(=fact)なのか。事実は考えではない。このマイク、私はその観念(=idea)をつくりだすことができるが、マイクは事実(=fact)である。私はそれに触れることができ、見ることができる」(「3感情」)

*2 事実は観察できる。

2) 「人はそれらについてのイメージをもっていないか。そのイメージは事実(=the fact)だろうか」(「7知識」知ることについてのコメントより)

3) これらは理想ではない。事実(=facts)である。私たちは事実に基づくことはできますか(=Can we be factual?)」(「6教育」'good'についてのコメントより)

*3 「事実」とは、ありのまま、あるがまま。そこには善も悪もない。起こっていること。

good

*1 「6教育」の中で'good'ということばが出てくるが、この「good」は悪に対立するもの、悪を否定するものではなく、また、概念でも理想でもない。この「good」を「善」や「良いもの」、 「善いもの」と訳すと、善悪の「善」というイメージを喚起しがちで、対立物、二極のうち的一方としてこの「good」をとらえることになってしまう。試行錯誤したが、クリシュナムルティの「good」に相当する日本語が見当たらないため、そのまま「good」と置いた。

1) 「'good'ということばは申し分なく合っている(=well-fitting)という意味である。心理的に、何の不和もなく、よいドアのように。よいモーターのように。わかりますか。'good'は全体性(=whole)、壊れていない(=not broken up)、ばらばらでない(=not fragmented)という意味でもある」(「6教育」)

2) 「goodは理想ではない。それは全体である(=be whole)こと、統合度をもつ(=have integrity)こと、恐れを抱えていないこと、混乱していないことである」(「6教育」)

3) 「つづいている混乱を修正しようとしたり、飾り立てたり、あるいは何らかのグループや機関に加わったりしようとするのではなく、人間として、世界である一人の人間として、根本的な変化 (=radical transformation) を自分が経験することである。そうしなければよい社会 (=good society) というのはありえないのである」(「10暴力」)

*2 なにかの対極でない「good」。全体が「good」。

「good」とは、たとえば善も悪も包含する、人がもつあらゆる衝動、性質を含んだ全体としての生そのもの。

*3 ユングの自己。

illusion

*1 「幻想」と訳している。

1) 「自分自身の中で実際に起きていることに直面するのが耐えられないとき、人はそれから逃れるために幻想をつくりだす。もし人が、実際に起きていることに直面することを嫌がったり、恐れるならば、その回避じたいが、それであるところのものから離れて、幻想や空想、ロマンティックな動きをつくりだす。「幻想 (=‘illusion’)」ということばは、「それであること (=that which is)」から立ち退くことを意味する」(「9 真理」)

2) 「もし人が、幻想やロマンティックで思弁的な理想や強烈な信仰をもっているなら、人は正直 (=honesty) でありえますか」(「6 教育」)

3) 「もし人が実際に起こっているものを観察することができるならば、そのとき、あらゆる種類の幻想を完全に避けることができるだろう。人はこれをできますか。人は自分が依存しているということを実際に見ることができるか。それが人に対する依存であれ、信仰や観念への依存であれ、あるいはとても興奮させた経験への依存であれ、依存は必ずや幻想をつくりだす」(「9 真理」)

4) 「思考はさまざまな形態の幻想をつくりだしてきた。国家や階級、さまざまな神、さまざまな信仰、さまざまな教条、さまざまな儀式、世界に行きわたっている途方もない宗教的迷信など、それらの中で安全は求められてきた。そして人々はこの安全の、この幻想のもつ危険を見ないのである」(「2 安全」)

*2 「幻想」とは現実でないもの、ほんとうでないもの。人がつくりだすもの。

ideal (理想), concept (概念), image (イメージ), idea (観念, 考え) も同様。

insight

*1 「洞察」と訳している。

1) 「それ (洞察) はものごと、思考の全体的な動き (=the whole movement of thought), たとえば嫉妬の動き全体を見抜く (=see into) ことである。貪欲の実体、悲しみの中身全

体を見る (=perceive) ことである。知的な能力の使用ではなく、知識 (=knowledge) がもたらす結果でもない」(「5 洞察」)

- 2) 「それ(洞察)はなにかを直ちに知覚する (=perceive instantly) ことであるのだが、それは真実で (=be true), 論理的で (=logical), まともで (=sane), 合理的であらなければならない。洞察は必ず瞬間にはたらく。それは、ある人が一つの洞察をもったが何もしなかった、ということにはならない。人が思考の全体的な性質 (=the whole nature of thinking) への洞察をもつならば、そのとき即座に行為が発生する」(「5 洞察」)

*2 「洞察」は瞬間的に起こる。時間(の経過)は必要条件ではない。

*3 「洞察」とは、見抜くこと、見通すこと。

分析、思考、知識は洞察とはまったく別物。むしろそれらの対極であるといえる。「見る」ことに知識も修行も要らない。

- 3) 「その傷は、人が自分自身について自分自身で作りだしてきたイメージである。だから、そのイメージがある限り、人は傷つきつづけるであろう、明らかに。そう、そういったことについて洞察をもつこと、分析ではなく、瞬間的に知覚すること、まさにその知覚 (=perception)こそが洞察なのである。それは人の全注意と全エネルギーを要する。そうした洞察において、傷は解消される」(「5 洞察」人が幼いころから受けたきた傷や苦痛についてのコメントより)

*4 「私」とは執着、「私」というのはイメージ。

名誉や富に執着して生きることも傷に執着して生きることも、どちらもイメージでしかない「私」、アイデンティティを求め、それを私として生きる動き。プラス(のイメージ)に同一化するかマイナス(のイメージ)に同一化するか、意識の核、「センター」をどこに置くかのちがひ。そのことを見ると解ける。見抜くと解ける。それが洞察。

integrity

*1 「6 教育」でクリシュナムルティが教育、goodについて話す中で、「integrity」ということばが出てくるが、そのまま integrity と置くことにした。「integrity」は研究社リーダーズ英和辞典によれば「(道徳的・人格的に信頼できる) 正直、清廉、高潔、誠実；完全、無欠(の状態)」とあるが、クリシュナムルティを読みながらいろいろ考えた結果、「integrity」に相当する日本語がないことに気づいた。日本(人)には integrity がないということなのかもしれない。

- 1) 「integrity」ということばは、全体であること、また、気持ちとことばにズレがないこと、言ったこととすることにズレがないことを意味する。integrity は正直さ (=honesty) を含んでいる。もし人が、幻想やロマンティックで思弁的な理想や強烈な信仰をもっているなら、人は正直でありえますか。信仰に対しては正直であるかもしれないが、それは integ-

rity ではない。] (「6 教育」)

*2 クリシュナムルティのことばから「integrity」とは何か考えてみる。

integrity: 嘘がない。裏表がない。後ろめたさがない。人に対しても自分に対しても。

integrity: 矛盾がない。一つのことに対しては誠実であっても、全体として見たときに矛盾を抱えていては integrity があるとはいえない。誠実さは一つの要素であるかもしれないが、誠実だけでは integrity があるとはいえない。

integrity: 全的である。排除を含まない。ばらばらでない。一貫している。

*3 「器が大きい」「懐が深い」「清濁合わせのむ」などの日本語。

*4 integrity は「全体」という視野をもっている。integrity とは、部分にかぎって通用する、相手によって変わるものではなく、全的にはたらくもの。全体を貫く一つの軸のようなもの。integrity がある人とは、価値の源泉を自分の内にもっている人。人格の統合度をもつ。善悪を越えた責任感をもっている。下される判断、決断はその責任と愛に基づく。

intelligence

*1 「知性」と訳している。

- 1) 「心 (=mind), あるいは思考 (=thought) が幻想の中で安全を求めてきたという真実を見るとき、その気づきこそが知性 (=intelligence) をもたらしめるのである」(「2 安全」)
- 2) 「一つのアイデアとしてではなく現実の事実 (=actual fact) として、(幻想の中で安全を求めていることの) この危険に人が気づくとき、この気づきこそが知性であり、完全な安全のこの上ないかたちなのである」(「2 安全」)

*2 クリシュナムルティは「見る (=see, observe)」という行為こそが人にとって最も重要かつ最も必要な行為であるととらえている。人は「見る」ことによって「気づき (=see, find, find out, realize, discover…)」、その気づきが人に変化を起こす。自由や理解、責任ある行動へと人を導くからである。

*3 「知性」とは「見る」こと、「気づく」こと。特別な力ではない。

intuition

*1 「直観」と訳している。

*2 いわゆる直観はほんとうに直観なのだろうか。

- 1) 「直観 (=‘intuition’)」ということばは、多くの人を使う、落とし穴のあるような (=tricky) ことばである。直観の実際は欲望が生み出したものであるかもしれない。人がなにかを欲望する。すると、二、三日後に、人はそれについての直観をもつ。そして、人はその直観を異常に重要であると考え。しかし、かなり深く分け入るならば、それは欲望や恐れ、あるいはさまざまなかたちのよろこびに基づいていると人は気づくだろう。特にかなり口

マンティックな、想像力に富み、感傷的で、なにかを求めている人々によって使われるとき、そのことばは疑わしい。彼らは確かに直観をもっているだろう。だが、彼らは相当、明らかに自身を隠蔽する(=self-deceptive)欲望を根拠としている」(「5 洞察」)

*3 欲望の口実としての直観。欲望の投射としての直観。

直観は、欲望の運動、偽装した欲望の運動であり、「よく見る(=observe)」こと、「見る(=see)」ことを妨げるバイアスの力であると考えられる。

knowledge (know)

*1 「知識」と訳している。

1) 「知識は過去からの経験を通して蓄積されてきたもの、脳に蓄えられているものである。完全な(=complete)知識はない。それゆえ、つねに知識とともに無知(=ignorance)がある。前後に繋がれた二頭の馬のように」(「5 洞察」)

*2 クリシュナムルティは、知識と無知はつねにもあることを「tandem」ということばを使って表現している。

2) 「なぜ知識は不完全なのか。知識とは何か。また、人が「私は知っている(=‘I know’)」というときに人が意味していることは何だろうか。「私は私の妻、私の夫、私のガールフレンド、ボーイフレンドを知っています」と人はいうだろう。だが、それらをほんとうに知っているのだろうか。一体、それらを知ることができるだろうか。人はそれらについてのイメージをもっていないか。そのイメージは事実だろうか」(「7 知識」)

*3 イメージをもっているということと「知っている」ということは全然ちがう。

3) 「知識は、生理学的なものであろうと、心理学的なものであろうと、つねに限られているのである」(「7 知識」)

4) 「私は自分の妻について心理学的な膨大な量の知識を築きあげる。正しかろうと、まちがっていようと、私の感覚に基づいて、私の野心、欲、ねたみに基づいて、私の自己中心的な行動によって。その知識は生きているその人(=the living person)に対するほんとうの観察(=actual observation)を妨げる」(「7 知識」)

*4 知識は過去である：～として見る＝～としてしか見ない

生の生きているものを見るということは、蓄積された知覚や知識、思考から自由であるということ。

observe/observation

*1 「観察する」「よく見る」と訳している。クリシュナムルティにおいては「見る」、「観察する」、「気づく」が最も重要なポイントである。「observe」は同様の意味で用いられる「see」とともによく使われるが、どちらも「見る」ことを指す。

- 1) 「人がだれかから聞いた一つの観念や一つの結論を通して事実を観察するとき、人はその事実を見ていない。もし人がその事実を見ているのならば、人はその事実をことばにしていけない」（「3感情」）
- 2) 「夫は妻を観察する。また、妻は夫を観察する。記憶、映像、感覚、いらだちのすべてをもって。彼らは決して直接に（=directly）観察しない」（「7知識」）
- *2 過去の知識や記憶、イメージを通してなにかを見る≠「見る」
- *3 エポケー。
 - 3) 「観察するとき、人は、そのものやその人について自分が作りだしてきたイメージを通して観察している。そのイメージなしに、ものごとや人を観察することができるか。つまり、それは観察において観察者がいなくなることは可能か、ということである。身近な、よく知っている人を観察するとき、イメージが現れる。親しければ親しいほど、イメージは強い。人はイメージをもたずにある人を見ることができるか。観察者なしに、その人を見ることができるか。すなわち、それが純粋な観察（=pure observation）である」（「7知識」）
 - 4) 「その観察において、選択がなく（=no choice）、方向づけがなく（=no direction）、純粋で完全な観察（=just pure, absolute, observation）がある。そのとき、観察されているものごとは消える」（「3感情」）
- *4 観察に全エネルギーが注がれている＝人の意識は空っぽ、いま目の前にある事実で満たされている＝ことばも思考も「私」も入る余地、場所がない。そのために使うエネルギーもない＝pure observation（＝クリシュナムルティのいう「注意」の状態）
- 5) 「だが、いまはその観察においてすべてのエネルギーが集中している。そのエネルギーに不足があるときにだけ、執着が起こるのである。思考による何の干渉もなく、完全な観察があるとき、どうして思考が入りこんでこようか」（「3感情」）
- 6) 「その観察において人の心が完全に透きとおる（=absolutely clear）ほどに、人はものごとをととてもとても間近で（=closely）調べなければならない」（「3感情」）
- *5 「観察する」とは、ただよく見ること。

見ると気づける。「見る」ことは「気づく」ことにとって必要不可欠な、一義的な行為であり、「洞察」や「知性」のまずはじめにある行為であるといえる。

perceive/perception

- *1 この翻訳では「知覚する」「見る」「気づく」と訳しているが、「perceive」はクリシュナムルティがよく用いる語の一つで、「観察する（=observe/observation）」「見る（=see）」とならんで、クリシュナムルティを読み解くうえでも理解するうえでも鍵になる重要なことばである。

- 1) 心 (=mind), あるいは思考 (=thought) が幻想の中で安全を求めてきたという真実を見る (=see) とき, その気づきこそが知性をもたらすのである (=that very perception brings intelligence) (「2 安全」)
- 2) 「そう, そういったことについて洞察をもつこと, 分析ではなく, 瞬間的に知覚すること, まさにその知覚こそが洞察なのである (=to perceive it instantly, then that very perception is insight) (「5 洞察」)
- 3) 「あなた自身の気づきがあなたを自由にする (=Your own perception sets you free.)」 (「1 自己」)
- 4) 「人は, 個人的な意見, 知覚, 経験を越えて, 自分自身で見つけ出さなければならない。それらはいつも相対的である。他方で, 相対的でなく, 絶対的な真理であるところの一つの知覚や見ることが存在する (=whether there is a perception, a seeing, which is absolute truth, not relative) (「9 真理」)

*2 「perceive」とは, 選択のない全的な, 瞬時の「受け取り」。

知識や経験に基づく理解や分析, 意図的また事後的な解釈, 情報の取捨選択がまったく行われていない知覚そのもの。認識や識別の過程を含まない。まったくの知覚。

psych-/psycho-, mind, heart……

*1 「psych-/psycho-」は「靈魂」「精神」「心理」の意とされているが, psychologist は心理学者, psychotherapist は心理療法家, psychoanalyst は精神分析医と訳されるなど, 訳語が一定でない。また, mind は「心」「精神」と訳され, heart が「心」「気持ち」「感情」と訳されることもある。これらのことばは, 「人」にとって核心的なことばであると思われるが, それらが明確な境界なく, 曖昧に使われていることがふしぎである。

the self

*1 「自己」と訳している。

一般に, 「self」は「自己」, 「ego」は「自我」と訳されるが, 日本語でいう「自己」とは何だろうか。「自己」ということばは口語的にも日常的にもよく使われているとはいえず, この翻訳の中でも, 「自己」を「私」あるいは「自分」と置いた方がより具体的で, より理解しやすいところが多いように思われる。

- 1) 「自己の本質はセンター(=the centre), 「私(=‘me’)」, さまざまな私の衝動にある。「私」はかりたてられるようにしてインドへ行き, 真理を見つけた」というように。すべての行動はこのセンターから起きている。大望, 野望, けんか, 不和, 意見, 判断, 経験, これらはすべてここを中心に行っている。この中心は外にはたらきかける意識的な自己であるだけでなく, 閉じていてはっきりしない深い内的な意識でもある」(「1 自己」)

- *2 centre はセンター，制御センターに近い感じであった。
自己の本質であるセンター，「私」とは，私の行動，意思，望み，判断，思考などを制御する私の中核，いわば私の司令塔。
- 2) 「気高いとか下劣であるとかいう理想に自己は同一化し，自己は理想のためにたたかう。しかし，それはやはり「エゴの旅行（＝‘the ego trip’）」である」（「1 自己」）
- 3) 「自分自身になにかを課すことでがんばり，さまざまな種類の瞑想へとすすんでいく者は努力に同一化する「私」につかまり，こういう。「成し遂げた」と。だがそういう「私」がなおセンターにいる」（「1 自己」）
- 4) 「自己」ということばを使うとき，あるいは「私」，自己を越えたなにかを表現するために何らかのことばを使うとき，もうそれは自己なのである」（「1 自己」）
- *3 宗教のいくつかに見られるように，いまある私とは別にほんとうの自己がある，いまある私を越えたところによりよい自己があると信じ，それに達しようとするとき，そのことじたい，それぞれの中で「私」がオペレーションを展開しているのであり，センターは存在している。
- *4 「私」とは，人がつくるもの。自と他を分かちしきり，壁のようなもの。なにかしようとするればするほど強固になる。なぜならそれも「私」の動きだから。
- 5) 自己から解放されることは可能だろうか。野菜のようにならずに，放心もせず，すこしおかしくなるということもなく。このことはいいかえれば，執着（＝attachment）から完全に自由になることは可能だろうか，ということでもある」（「1 自己」）
- 6) 「自己のもつ大きな要素の一つが執着であるということ，また，それが世界において何をしているのか，他の人との関係やいさかい，分裂など関係におけるあらゆる醜さにおいて，どういうことをしているのかということに気づけたならば，執着のほんとうのすがたを見るならば，そのとき，人は自己から自由なのである」（「1 自己」）
- *5 見る（＝see）こと，自分自身の気づき（＝your own perception）が人を自由にする。見ることによってなるほどという瞬間的な気づきが起る。（→洞察）
- 7) 「私がない（＝there is no self）ときにだけ，人は自分が自分自身にとっての光となりうるのである」（「4 ことば」）
- *6 ピアジェのいう脱中心化は，視点の転換，視点を動かすことによって起る。相手の視点に立つということ。
- *7 この「me」は仏教でいう「我」に相当すると思われる。「我」にはさまざまな意味があるが，行為主体としての自己，主体的存在，自我に対する執着，「われ」という観念という意味をもつ。また，仏教語で，執着を離れた心の状態をあらわすことばとして「無想の心地（むそうのしんじ）」がある。

thought/thinking

*1 「思考」と訳している。

- 1) 「思考は記憶として蓄えられている経験や知識の蓄積による結果あるいは反応である。思考は知識を根拠としているか、知識の結果である。知識が限られているから、思考は限られている。思考は決して包括的(=all-inclusive)ではありえない。それゆえに、思考は永遠に限られて(=is confined)おり、限定されて(=limited)おり、狭い(=narrow)」(「5 洞察」)
- 2) 「しかし、目が内面に向かうならば、人は「私(=‘me’)」もまた物質であるということを見る。そして思考が物質である」(「9 真理」)
- 3) 「では、人は気づいているというとき、そのことによって人が意味するのは、すなわち知っている(=know)、わかる(=recognize)とは何なのか。思考は執着を認めるのか。人はいう。「ええ、私は執着しています」と。だが、「私は執着している」といっているのは思考の活動(=the activity of thought)ではないのか」(「3 感情」)
- 4) 「ピンを足に刺せば痛みが起きる。そのとき、痛みがやむようにという切望が生じる。それが思考の契機であり、神経系の反応である。そしてそのとき、その反応への同一化が起こり、人はいう。「私は苦痛がやんで、二度と痛みにさらされないことを望む」と。このことこそが思考というものの運動である」(「8 苦痛」)

*2 思考は運動。人はその運動全体を観察することができる。(→洞察)

6. クリシュナムルティ文献リスト

クリシュナムルティによる著作物

- The Awakening of Intelligence*, 1987 Harper Collins
Beginnings of Learning, 1978 Penguin Books; 大野純一訳『学びと英知の始まり』春秋社
Beyond Violence, 1973 Gollancz; 勝又俊明訳『暴力からの解放』たま出版 1982年
The Book of Life Daily Meditations with Krishnamurti, 1995 Harper Collins
Commentaries on Living (1)~(3), 1967 Theos Pub Hse; 大野純一訳『生と覚醒のコメンタリー クリシュナムルティの手帖より(1)~(4)』春秋社 1984年
Early Writings of Krishnamurti, 2 Vols, 1974 Krishna Pr.
Education and the Significance of Life, 1981 Harper Collins; 菊川忠夫・杉山秋雄訳『道德教育を越えて』霞が関書房 1977年
Krishnamurti, Jiddu and Bohm, David, *The Ending of Time*, 1985 Harper Collins
Exploration into Insight, Asia Bk Corp.
The First and Last Freedom, 1975 Harper Collins; 根木宏・山口圭三郎訳『自我の終焉』篠崎書林 1980年
The Flame of Attention, 1984 Harper Collins
The Flight of the Eagle: Authentic Report of Talks & Discussions in London, Amsterdam, Paris,

- & Saanen, Switzerland, 1989 Harper Collins; 菊川忠夫訳『自由への道』霞が関書房
Freedom from the Known, 1975 Harper Collins; 十菱珠樹訳『自己変革の方法』霞が関書房 1982年
Freedom, Love and Action, 1994 Shambhala Pubns.
The Future is Now, Gollancz
The Future of Humanity 1986 Mirananda
The Impossible Question, 1978 Penguin Books; 勝又俊明訳『英知の探求』たま出版 1980年
Krishnamurti's Journal, Lutyens, Mary, ed, 1982 Harper Collins; 宮内勝典訳『クリシュナムルティ
の日記』めるくまー社 1994年
Krishnamurti's Notebook, 1984 Harper Collins; おおえまさのり監訳・中田周作訳『クリシュナムル
ティの神秘体験』めるくまー社 1985年
Krishnamurti on Education, 1987 Asia Bk Corp; 大野純一訳『英知の教育』春秋社
Krishnamurti to Himself : His Last Journal, 1987 Harper Collins; 高橋重敏訳『最後の日記』平河
出版社 1994年
Last Talks at Saanen 1985, 1986 Gollancz
Letters to the Schools (1)~(2), 1981 Mirananda
Life Ahead, 1963 Victor Gollancz; 大野純一訳『未来の生』春秋社
Meditations, 1991 Shambhala Pubns
Meeting Life : Writings & Talks on Finding Your Path Without Retreating from Society, 1991
Harper Collins
Mind Without Measure, 1979 Krishnamurti Foundation India
The Network of Thought, 1983 Harper Collins; 渡辺充訳『思考のネットワーク』JCA 出版
On Conflict, 1994 Harper Collins
On Fear 1994, Harper Collins
On Freedom, 1991 Harper Collins
On God, 1992 Harper Collins
On Knowledge and Learning, 1994 Harper Collins
On Living and Dying, 1992 Harper Collins
On Love and Loneliness, 1994 Harper Collins
On Mind and Thought, 1994 Harper Collins
On Nature and the Environment, 1991 Harper Collins
On Relationship, 1992 Harper Collins
On Right Livelihood, 1992 Harper Collins
On Truth, 1994 Harper Collins
The Only Revolution, 1970 Victor Gollancz; 大野純一訳『クリシュナムルティの瞑想録』平河出版
社 1982年
*The Penguin Krishnamurti Reader (The Problems of Living, For the Young, Questions and
Answers 収録)*, 1970 Penguin Books
Poems and Parables, 1981 Gollancz
The Second Penguin Krishnamurti Reader (The Only Revolution, The Urgency of Change 収録),
1972 Penguin Books
Questions and Answers, Mirananda, 1982 Krishnamurti Foundation Trust, UK
Talks and Dialogues of J. Krishnamurti, 1983 Avon
Talks with American Students, 1988 Shambhala
Think on These Things (USA), 1989 Harper Collins (*This Matter of Culture (England)*, 1964 Victor
Gollancz); 藤仲孝司訳『子供達との対話』平河出版社 1995年

- Total Freedom*, 1996 Harper Collins
Tradition and Revolution, 1972 Asia Bk Corp
Truth and Actuality : Conversations on Science & Consciousness, 1980 Harper Collins ; 大野純一・五十嵐美克・武田威一郎訳『真理の種子』めるくまーる社 1984年
The Urgency of Change, 1971 Victor Gollancz ; 松本恵一訳『自己の変容』めるくまーる社
Washington D.C. Talks 1985, Mirananda
The Way of Intelligence, 1985 Krishnamurti Foundation India
The Wholeness of Life, 1985 Asia Bk Corp ; 大野純一・聖真一郎訳『生の全体性』平河出版社 1986年
A Wholly Different Way of Living, 1991 Victor Gollancz
The World of Peace, 1985 Jadrony
You are the World, 1989 Harper Collins
The Collected Works Vol.1~17, Kendall-Hunt

クリシュナムルティの伝記・評論

- The Amazing Discoveries of J. Krishnamurti* (by S. A. Henry, 1968 Rathnam Press, Bombay)
Basic Self-Knowledge : An Introduction to Esoteric Psychology based on the Gurdjieff System of Development with some reference to the writings of Krishnamurti (by Harry Benjamin, 1971 Samuel Weiser, New York)
The Beauty of the Mountain (by Friedrich Grohe)
Candles in the Sun (by Emily Lutyens, 1957 Rupert Hart-Davis, London)
The Cosmic Womb (by Arthur W. Osborn, 1969 Theosophical Publishing House, Wheaton)
Crisis in Consciousness (by Robert Powell, 1967 James Clarke & Co., London)
The Free Mind : The Inward Path to Liberation (by Robert Powell, 1972 Julian Press, New York)
God is My Adventure (by Rom Landau, 1935 Ivor Nicholson & Watson, London)
Krishnamurti (by A. J. G. Methorst-Kuiper, 1971 Chetana, Bombay)
Krishnamurti—A Biography (by Pupul Jayakar)
Krishnamurti : An Introduction (by Kewal Motwani, 1957 Ganesh, Madras)
Krishnamurti and the Unity of Man (by Carlo Soares, 1955 Chetana, Bombay)
Krishnamurti and the World Crisis (by Lilly Herber, 1935 George Allen & Unwin, London)
Krishnamurti, l'homme et sa pensee (by Rene Fouere) ; ルネ・フェレ著, 大野純一訳『クリシュナムルティ・懐疑の炎』瞑想社
Krishnamurti : "Man is his own liberator" (by Ludovic Rehaul, 1939 Christopher Publishing House, Boston)
Krishnamurti : The Man and his Message (by Lilly Herber, 1931 George Allen & Unwin, London)
Krishnamurti : The Man and his Teaching (by Rene Fouere, 1952 Chetana, Bombay)
Krishnamurti : The Man in Revolt (by Andre Niel, 1957 Chetana, Bombay)
Krishnamurti : The Man, the Mystery and the Message (by Holroyd)
Krishnamurti : The Open Door (by Mary Lutyens) ; メアリー・ルティエンス著, 高橋重敏訳『クリシュナムルティ・開いた扉』めるくまーる社
Krishnamurti : The Years of Awakening (by Mary Lutyens, 1975 John Murray, London) ; メアリー・ルティエンス著, 高橋重敏訳『クリシュナムルティ・目覚めの時代』めるくまーる社
Krishnamurti : The Years of Fulfilment (by Mary Lutyens, 1983 John Murray, London) ; メアリー・ルティエンス著, 高橋重敏訳『クリシュナムルティ・実践の時代』めるくまーる社
Life and Death of Krishnamurti (by Mary Lutyens)

- The New Religions* (by Jacob Needleman, 1970 Doubleday, New York)
The mind of Krishnamurti (Jaico Publishing House, 1955 Chetana, Bombay)
Raman Maharishi and J.Krishnamurti (Concomitant Factors in their Teachings) (by S. R. Pant, 1972 Shankaraji Narayan Publications, Poona)
Sages, Saints and Arunachala Ramana (by Feroza Taleyarkhan, 1970 Orient Longman, Madras)
Three Great Sages (Sri Aurobindo, Dr. Annie Besant, J. Krishnamurti) (by Kewal Motwani, 1951 Ganesh, Madras)
The Travel Diary of a Philosopher (by Hermann Keyserling, 1925 Jonathan Cape, London)
The Yoga of J. Krishnamurti : A Catechism (by A. D. Dhopeswarkar, 1975 Chetana, Bombay)
The Wisdom of Insecurity (by Alan Watts, 1974 Rider and Company,)

ビデオとカセットテープ

- The Real Revolution 1966
Krishnamurti : The Challenge of Change
With A Silent Mind
The Seer Who Walks Alone
The Role of a Flower
The Future of Humanity
On The Nature of Love
Ojai Public Talks 1982, 1983, 1984, 1985
Ojai Talks 1982 No.1 Holistic Observation
Ojai Talks 1982 No.2 Crisis in Ourselves
Ojai Talks 1982 No.3 Thought and the Source of Disorder
Ojai Talks 1982 No.4 The Content of One's Consciousness
Ojai Talks 1982 No.5 On the Nature of Love
Ojai Talks 1982 No.6 The Thinking Machine and Meditation
Ojai Talks 1982 No.7 Questions and Answers 1
Ojai Talks 1982 No.8 Questions and Answers 2
Ojai Talks 1982 No.9 Questions and Answers 3
Ojai Talks 1982 No.10 Questions and Answers 4
Ojai Talks 1983 No.1 Responsibility for the World
Ojai Talks 1983 No.2 What Is
Ojai Talks 1983 No.3 The Recording Machine
Ojai Talks 1983 No.4 Freedom and the Sacred
Ojai Talks 1983 No.5 Questions and Answers 1
Ojai Talks 1983 No.6 Questions and Answers 2
Ojai Talks 1984 No.1 Why Human Beings Hurt Each Other
Ojai Talks 1984 No.2 The Invention of Gods
Ojai Talks 1984 No.3 Invention and Motive
Ojai Talks 1984 No.4 The Absence of the 'Me'
Ojai Talks 1984 No.5 Questions and Answers 1
Ojai Talks 1984 No.6 Questions and Answers 2
Ojai Talks 1985 No.1 Responsibility in a Chaotic World
Ojai Talks 1985 No.2 Is There Something Beyond Thought?
Ojai Talks 1985 No.3 Beauty, Pleasure, Sorrow and Love

- Ojai Talks 1985 No.4 What is a Religious Mind?
Ojai Talks 1985 No.5 Conversations I (Questions and Answers 1)
Ojai Talks 1985 No.6 Conversations II(Questions and Answers 1)
Brockwood 1983 No.1 How can the Brain Transform Itself?
Brockwood 1983 No.2 Only in Peace Can the Human Mind be Free
Brockwood 1983 No.3 Freedom From the Self
Brockwood 1983 No.4 What Kind of Brain is Needed for Meditation?
Brockwood 1983 No.5 Questions and Answers 1
Brockwood 1983 No.6 Questions and Answers 2
Brockwood 1984 No.1 The Cause of Conflict in Relationship
Brockwood 1984 No.2 Looking at Fear, That Extraordinary Jewel
Brockwood 1984 No.3 Is It Possible to End All Sorrow?
Brockwood 1984 No.4 The Nature, Depth and Beauty of Death
Brockwood 1984 No.5 Questions & Answers 1
Brockwood 1984 No.6 Questions & Answers 2
Brockwood 1985 No.1 Why Do We Have So Many Problems?
Brockwood 1985 No.2 The Relationship of Time and Thought to Fear
Brockwood 1985 No.3 The Relationship of Freedom to Self Interest
Brockwood 1985 No.4 The Nature of the Brain That Lives Religiously
Brockwood 1985 No.5 Questions & Answers 1
Brockwood 1985 No.6 Questions & Answers 2
Madras, India Talks 1985 No.2 Can Thought Give human Beings Security?
Madras, India Talks 1985 No.3 The Shallowness of a Life Without Passion
Madras, India Talks 1985 No.4 Death is Not at the Far End of Life
Madras, India Talks 1985 No.5 Questions & Answers 1
Madras, India Talks 1985 No.6 Questions & Answers 2
Madras, India Talks 1985-86 No.1 The Fact and the Idea of the Fact
Madras, India Talks 1985-86 No.2 The Origin of Primal Energy
Madras, India Talks 1985-86 No.3 The Inquiring Brain
Saanen 1982 No.1 Why Does Man Live in Conflict?
Saanen 1982 No.2 To Be Utterly Free of Disorder
Saanen 1982 No.3 Seeing Self Interest as the Root of Fear
Saanen 1982 No.4 Beauty Is the Quiet of the Self Forgotten
Saanen 1982 No.5 Silence as the Grand of the Eternal
Saanen 1982 No.6 Questions & Answers 1
Saanen 1982 No.7 Questions & Answers 2
Saanen 1982 No.8 Questions & Answers 3
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 1 The Origin of Conflict (No. 1~No.10 はカセットテープのみ)
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 2 That Which Cannot Be Put Into Words
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 3 Irrationality
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 4 Why Don't I Change?
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 5 The Relationship Between Me and Truth
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 6 Thought and Insight
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 7 Division

Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 8 The Immensity
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 9 The Renewal of the Human Brain
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 10 Am I Willing to Face Absolute Emptiness?
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 11 Insight and the Structure of Being
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 12 Beyond the Man Made Mind
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 13 The Stupefied Mind
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 14 What is Materialism?
Krishnamurti and Professor David Bohm 1980 No. 15 Is There Another Way of Communicating?
The Transformation of Man No.1 Why Human Beings Live as They Do in Chaos and Misery
The Transformation of Man No.2 The Need for Change and Why Human Beings Do Not Change
The Transformation of Man No.3 The Conscious and Unconscious Mind
The Transformation of Man No.4 The Transformation of Human Consciousness
The Transformation of Man No.5 Psychological Death and the Emptying the Mind
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.1 Knowledge and Transformation
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.2 Knowledge and Human Relationships
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.3 Responsibility
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.4 Responsibility and Relationship
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.5 Order
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.6 Fear
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.7 Desire
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.8 Pleasure
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.9 Inward or True Beauty
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.10 The Art of Listening
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.11 The Nature of Hurt
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.12 Love and Pleasure
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.13 A Different Way of Life
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.14 Death
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.15 Religion and Authority 1
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.16 Religion and Authority 2
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.17 Meditation 1
Krishnamurti with Dr. Allan W. Anderson No.18 Meditation 2
The Nature of the Mind No.1 Roots of Psychological Disorder
The Nature of the Mind No.2 Psychological Suffering
The Nature of the Mind No.3 The Need for Security
The Nature of the Mind No.4 What is a Healthy Mind?
The Nature of the Mind No.5 The Self
Krishnamurti and Professor Huston Smith 1968
Washington, D. C. 1985 No.1 In the Present is the Whole of Time
Washington, D. C. 1985 No.2 To Live with Death
Krishnamurti and Pupul Jayakar 1983 No.1 Is There an Eastern Mind and a Western Mind?
Krishnamurti and Pupul Jayakar 1983 No.2 Is There a Space Without End?
Rishi Valley Students 1986 No.1 Why Do We Have Opinions?
Rishi Valley Students 1986 No.1 Who is Krishnamurti?
Krishnamurti, David Bohm and Maurice Wilkins 1982
Conversation with Ronald Eyre, Brockwood Park June 24. 1984

J. Krshnamurti with Rev. Eugene Shallart No.1 Seeing
J. Krshnamurti with Rev. Eugene Shallart No.2 Choiceless Awareness
Krishnamurti at Los Alamos National Laboratory 1984 No.1 Thought Can Never Be Creative
Krishnamurti at Los Alamos National Laboratory 1984 No.1 Creation Comes Out of Meditation
The Power of Illusion Krishnamurti and Dr. David Shainberg
United Nations, New York 1985
What is Love? Ojai Public Talk No.5 1977
Krishnamurti in Discussion with Iris Murdock 1984
Is Belief Necessary?
A Dialogue With Oneself
Discussions with Buddhist Scholars No.1 Truth
Discussions with Buddhist Scholars No.2 Death
On Transformation
The Book of Oneself
New York Town Hall 1971, Talks No.1, 2, 3, 4
Stillness, Time and the Brain (カセットテープのみ)
The Anatomy of Insight : Computer Effect on Man (〃)
Krishnamurti and Swami Venkatesananda No.1 Can Another Dispel the Darkness in Oneself? (〃)
Krishnamurti and Swami Venkatesananda No.2 Can One Experience the Infinite? (〃)
Thought Breeds Fear (〃)
The Light In Oneself (〃)
A Religious Life 1969 (〃)
Mind In Meditation (〃)
Krishnamurti On Relationship 1973 (〃)
Krishnamurti On Enlightenment 1973 (〃)
New Dimensions Interview with Krishnamurti (〃)
The Cause of War (〃)
Meditation That Transforms the Mind (〃)
Sonoma State University, California Talk ; February 10, 1969 (〃)

☆著作物については <http://flp.cs.tu-berlin.de:1895/books/pb-directory-index.html> で、ビデオテープ・カセットテープについては <http://rain.org/~kfa/zctva.html> で、内容、価格、時間など具体的に知ることができ、発注することもできる。なお、クリシュナムルティ・ファウンデーション・オブ・アメリカ (Krishnamurti Foundation of America) のページを開けば、クリシュナムルティについての情報やファウンデーションの活動について、より多く、最新の情報が直接入手できる (<http://www.rain.org/~kfa>)。

(つづく)

— 1997.8.26受稿 —